

商法理由書 第五卷

司法部記錄文庫
第七百十九號
二冊ノ内

第五號
第二架
第八

司法部記錄課藏書
第一
二號

司法部
第五三號
寄贈圖書文庫

XB200
S 25



LB400
P25-1
7.C.

商法理由書

自第一千二百三條
至第一千二百四條

第六章 債權者

第一節 債權ノ届出及ニ確定

第一千二十三條

破産者ノ總債權者ハ破産決定ノ公告ニ因リ債
 權届出ノ期間ニ其債權ヲ破産主任官ニ届出ツ
 可キ旨ノ催告ヲ受ケタルモノトス其届出ニハ
 各債權ノ合法ノ原因及ニ請求金額若シ優先權
 アルモノハ其權利ヲ明記シ且證據書類又ハ其
 謄本ヲ添フ可シ
 他所ニ任スル債權者ハ裁判所所有地ニ代人ヲ
 置ク可シ

債權及ニ代人任置ノ届出ハ書面ヲ以テ又ハ調

書ニ筆記セシメテ之ヲ為ス。得書面ヲ以テ
スル場合ニ在テハ二通ヲ差出スト。要ス
所在ノ知レタル債權者ハ右ノ外特ニ裁判所ヨ
リ書面ヲ以テ其債權届出ノ催告ヲ受ク然レ
其書面カ債權者ニ達セサルモ此カ為メ損害賠
償ノ請求ヲ為ス。得ス。

財團ニ對スル債權ノ届出期日調査期日及ヒ
債權者集會期日ハ第九百八十條ニ從ヒ必
ス破産宣告ニ掲ケサルヘカラス。獨逸刷産法
第一百二條佛國商法第四百九十二條ニ依レハ
眞管財人ナルモノ、任命アルモノ其債權ヲ
届出サル債權者ハ特別ニ裁判所書記ノ書面

ヲ以テ督促スルモノトス然レモ債權者ハ破
産宣告ノ後直ニ其届出ヲ為スト。得ルハ勿
論トス。同上第四百九十一條。千八百五十五年
普魯西刷産法第六十七條亦之ト相似テ
第一ノ調査會期日ニ届出サル債權者ハ再ヒ
其期日ヲ立テ、更ニ届出ヲ促スモノトス。現
今獨逸刷産法第百廿六條第百三十條ニ依レ
ハ調査會ハ唯々一回ニ止マル。本案亦之ニ
倣フ。然レモ白國商法第四百九十六條ノ例ニ
倣ヒ破産宣告ヲ公告スルト同時ニ其所在分
明ナル債權者ニ特別ノ告知ヲ為シ届出期日
及調査期日ヲ直ニ破産宣告ノ日附ト連接セ

シケルハ便宜ナルニ似テ是レ破産手續ヲ大ニ簡畧迅速ナラシメ全債權者ヲ同一ニ論スルノ旨趣ニ稱フモノトス殊ニ他所ニ在ル債權者ニシテ新聞紙上ニ就テ破産宣告ヲ知ラサル者ヲシテ破産處分内ヨリ排除シ或ハ期日ヲ過マルカ如キト勿ラシムヘキナリ所在分明ナル債權者ニ特別ノ催告ヲ為スハ破産手續ヲ以テ債權者ノ權利ヲ短縮シ事情ニ依リ財團ヨリノ辨償ニ與カラサルカ如キトアルカ故ニ必要ナリ(第千八十三條)故ニ其債權ヲ實行スヘキ特別ノ機會ヲ之ニ與ヘサルハ便宜ニ戾リ且酷ニ涉ル蓋シ債權者ノ氏

名ハ貸方借方對照表及ヒ取引帳簿ニ就テ知ルヘシ故ニ特別ノ通知ヲ為スニハ先ツ右對照表ヲ調製シ取引帳簿ヲ檢査セサルヘカラサルヲ以テ破産宣告公告ノ後多少ハ時日ヲ經過シテ初メテ之ヲ為ストテ得ヘシ故ニ本案ニハ特別ノ催告(通知)期日ヲ掲ケスト雖モ毫モ不用ノ延滞アルヘカラス其書狀ノ發送ハ可及的速ニセサルヘカラサルト勿論ナリ以テ右ノ如ク暫時ノ延滞アルカ為メニ所在分明ナル債權者一ニ損失ヲ受ルトナシ何トナレハ破産ノ事實ハ所在分明ナラサル債權者ト同レク破産宣告ノ公告ニ由テ知り得ヘ

ケレハナリ右通知書ノ法式ニ就テハ本案一
モ言フ所ナシ宜シク裁判所普通ノ文体ニ因
ルヘク之ヲ發スルハ破産主任官タルヘク或
ハ同官ノ命令ニ由リ裁判所書記タルモ妨ケ
ナシ而シテ個々ニ書面ヲ與フルモ廻狀ヲ以
テオルモ共ニ可ナリ其廻狀ヲ用エルハ佛國
及ニ白國ノ例規ナリ(アラウール第五冊第三
百四十六葉及ニ白國商法第四百九十六條)
届出ハ訴訟ノ体裁ヲ以テセス又其届出タル
債權ノ審問裁決ニ就テモ法式的ノ訴訟手續
ヲ守ルヲ須ヒス夫レ破産處分ハ急施ノ處分
ニシテ無用鄭重ノ法式ハ之ヲ省カサル可ク

ス故ニ各債權者ノ財團ニ就テ要求スル所ノ
者ヲ掲ケ其大要ノ理由ヲ具フレハ既ニ足レ
リ然レド唯タ破産者ノ其契約等ニ依リ最初
負フ所ノ金額ヲ掲クルモ未タ充分トセス宜
シク其財團ヨリ拂受ケントスル所ノ金額ヲ
掲ケサル可ラス今或ハ最初ノ金額既ニ幾分
ノ消却ニ及ヒタル等ニ依リ其債權額ニシテ
最初ノ額ヨリ少キトアルモ又未收ノ利子或
ハ損害賠償等ノ之ニ加ハルアリテ其額ノ最
初ノ額ニ超ユルアルモ共ニ然リ而シテ本來
金額ニ在ラサル債權ニ於テハ價額賠償若ク
ハ損害賠償トシテ要求スル所ノ金額ヲ掲ク

ハキナリ今又届出ノ義務ハ書入質主及ヒ質
主等ニ在ラモ之ヲ守ラサルヘカラス(獨逸刑
産法第百廿七條佛國商法第五百一條)此等ノ
債権者ハ其別除權ヲ棄捐スルモ妨ケナク此
場合ニ在ラハ其優先權ヲ失ナクナク尋常
ノ債権者ニ先ケテ財團ヨリ辨償ヲ受ク又其
別除權ヲ棄捐セサル場合ニ於テモ其確定ヲ
經タル後ニ非サレハ其權ヲ施用スルヲ得ス
即チ其債権モ調査ヲ經サル可ラス又第九百
九十條或ハ第九百九十二條ニ戻リ記入ヲ為
シタルキノ如キハ他ノ債権者ノ異議ヲ受ル
ナリ但シ債権者ノ優先權ハ都テ官權ニ藉

リテ左右スルナリトス(サルウエ)第五百
五十七條

佛國商法第四百九十一條ニハ負債證書ノ原
本ヲ差出スヘキモノトス獨逸刑産法第百廿
七條ニハ其謄本タルモ妨ケナシトス蓋シ此
兩法後者ヲ以テ至當トスルカ如シ何トナレ
ハ原本ハ調査會ニ差出スルハ既ニ充分ナル
ノミナラス債権者ノ姑且ク其原本ヲ携持ス
ルノ理由ヲ有スルナリトキニ非ス殊ニ其債権
ヲ共同義務者ニ對シテ執行スルカ如キ片ハ
之ヲ携持スルノ欠クヘカラサルナリトアレハナ
リ又届出ハ何レノ場合ヲ問ハス破産主任官

= 差出スヘシトスル = 就テモ獨逸劇産法
 第百廿七條 = 做フタリ佛國高法第四百九十
 十條及ヒ第四百九十二條 = 依レハ裁判所書
 記 = 届出ルモ管財人 = 届出ルモ隨意トス蓋
 シ獨逸法ハ佛法 = 比スレハ安全 = シテ且權
 利上ノ要求ヲ裁判上ニ於テ執行スルノ順道
 = 適ヘリト云フヘシ加之證書類ヲ引渡スニ
 一層安全ナルヲ得ヘキナリ
 管財人ノ届出ノ騰本ヲ受クルハ調査會前ニ
 之ヲ假 = 調査シ破産者ノ取引帳簿及ヒ他ノ
 書類ト對照スル為メ = 必要ナリ此必要ナル
 假調査ノ為メ = ハ届出期日ト調査期日トノ

間 = 相應ノ日子ナカルヘカラス而シテ此日
 子ハ其期スル届出ノ多寡難易 = 從ヒ定ムヘ
 キナリ佛國高法第四百九十三條 = ハ之ヲ三
 日内ト定ム是レ短 = 過クルヤ明ナリ獨逸劇
 産法 = ハ一週間乃至ニヶ月ト為ス是レ却テ
 長 = 失レ他ノ處置殊 = 和解期日(調査期日ノ
 後 = 非サレハ為ス能ハス)ヲ無用 = 遷延スル
 ヲ恐アリ故 = 本案ハ十日乃至十五日ト為ス
 ラ至當ト見タリ(第千二十五條第三項)
 届出期限ハ第九百八十條 = 猶ヒ多クモ三ヶ
 月乃至六ヶ月 = 超ユヘカラス獨逸劇産法第
 百廿六條 = 依レハ三週間乃至三ヶ月トス佛

國高法第四百九十二條ニハ廿日ヲ以テ最下
限トシ裁判所々在地ヲ隔ツルノ里程ニ隨ヒ
延長ス故ニ甚々遠地ニ在ル債權者ノ為メニ
八千八百六十二年五月三日ノ訴訟法第七十
三條ニ依リ五ヶ月乃至八ヶ月ニ延長シ且海
戰ノ時ニハ之ヲ倍加スルヲ得白國高法第四
百六十六條第四百九十七條ニ依レハ廿日ヲ
以テ常例ノ届出期限トシ破產主任官ノ了見
ヲ以テ遠地ノ債權者ノ為メ之ヲ延長スルヲ
得然レモ本案ニハ確定畫一ノ期限ヲ以テ勝
レリト信シタリ但々債權者ノ國內ニ在ルト
國外ニ在ルトニ由テ其期限ヲ二様ニシ從テ

調査會モ二様ニスルハ妨ナシト雖モ
其處分ニ至テハ國外ノ債權者ヲ待タズ國內
ノ債權者ニ對シ續行スルヲ得但々財團配當
ニ在テハ國外ノ債權者ヲ待ツヘシ蓋シ之カ
為メニ國外ノ債權者ハ協解ノ會議ニ於ルカ
如キ場合ニ於テ不利ヲ免レサルヘシト雖モ
此不利アルカ為メニ多數ノ債權者ノ利益ヲ
顧ミサルノ理ナキナリテガテワール第五冊第
三百四十八葉

第一千二十四條

届出ハ之ヲ受取リタルハ直チニ順次番號ヲ付
 シテ二箇ノ表ニ記載ス可シ其一ニハ優先權ヲ
 掲ケ他ノ一ニハ通常ノ債權ヲ掲ケ此債權表ハ
 公衆ノ展閱ニ供スル為メ裁判所ニ之ヲ備フ
 管財人ハ其使用ノ為メ届出書及ヒ債權表ノ謄
 本ヲ受領ス

是レ獨逸例產法第百廿八條及ヒ白國商法第
 五百七條ニ掲ケ債權表ハ後日ノ調査管財人
 ノ假調査及ヒ破産ニ關係アル人々ヘノ通知
 ノ基礎トナル貸方借方對照表ハ右ノ目的ニ
 供スルニ充分ナラス何トナレハ是レ唯々破

産者ノ取引帳簿ヨリ校書シタルモノニシテ
充分ノ信任ヲ置ク可ラサルト多ケレハナリ
其債権表ヲニ様ニ別ツハ債権者ニ優先権ア
ル者ト尋常ノ者トノ差アレハナリ此表ニハ
第千二十三條ニ循ヒ届出ル所ノ要目ヲ記載
シ且空欄ヲ設ケテ調査ノ結果及ヒ判決ノ結
果ヲ記載スルニ供ス

第千二十五條

調査會ハ管財人及ヒ成ル可ク破産者ノ面前
於テ破産主任官之ヲ開キ且其調査ヲ作ルヘシ
債権者ハ自身又ハ代理人ヲ以テ此會ニ参加ス
ルヲ得

破産主任官ハ債権者ニ取引帳簿若クハ其校書
ノ提出ヲ命ズルヲ得調査ノ結果ハ債権表及
ヒ提出シタル債務證書ニ附記シ且各債権者又
ハ其代理人ニ告知スルヲ要ス

調査會ハ届出期間ノ滿了後十日乃至十五日間
ニ之ヲ開クヲ通例トス

届出期間ノ滿了後ニ届出テタル債権ハ調査會

於之ヲ調査スルヲ得然レハ其調査ヲ為
ス。付キ異議ノ申立アリタルキ又ハ調査會
ノ終リタル後債權ヲ届出テタルキハ其債權者
ノ費用ヲ以テ新ナル調査會ヲ開ク
届出タル債權ヲ調査スルハ裁判所ニ於テ
其會議ヲ為スト雖モ定常ノ訴訟法式ヲ踐ム
ヲ要セス唯タ適宜ノ訊問及關係者間ノ談話
ヲ以テス關係者トハ第一ニ管財人次ニ債權
者トス何トナレハ債權者ヲ關係人トスルハ
ト要求ノ加ハル毎ニ財團ノ配當額ヲ減スレ
ハ調査會ハ破產主任官ハ其會ヲ統掌シ總テ證明
ノ為メニ必要ナル命令ヲ下スヘシ殊ニ債權

者ノ取引帳簿若クハ其抜書ヲ差出サシムル
トヲ得破產者ノ帳簿及ニ書類ハ調査ニ供ス
ヘキカ故ニ調査期日ニ持參セシムヘキヲ無
論ナリ又破產主任官ハ必要ナル場合ニハ調
査會ニ於テ為シ得ヘキ者ヲ限トシ證據人ノ
訊問ヲ為スヲ得且破產者モ此會ニ呼出シ必
要ノ辨明ヲ為サシムヘシ然レハ若シ失跡シ
タル等ノ場合ニ於テハ必スシモ破產者ノ立
會ヲ要セス債權者亦タ必スシモ出頭ヲ要セ
ス此會ニ出頭セサル債權者ノ債權モ之ヲ調
査ス調査一日ヲ以テ終ラサルハ翌日ニ繼
キ時日ヲ隔テス終局ニ至ラシムヘシ佛國高

法第四百九十三條乃至第四百九十七條白國
高法第五百條乃至第五百三條獨逸劇產法第
百廿九條乃至第百卅一條

届出期限ハ遲滯ノ為ニ辨償ニ加ハラサル
ニ至ルカ如キ訴訟法上ノ意義ニ於ケル失權
期限ニ非ス後レテ届出テタル債權ト雖モ亦
皆之ヲ受理シ調査ヲ行フ但々其後レタルノ
結果ハ債權者ノ責ニ歸ス(獨逸劇產法第百卅
條佛國高法第五百三條白國高法第五百三條
第五百八條)故ニ其期ヲ後レタル債權者ハ為
メニ生レタル調査ノ費用ヲ負擔シ又此調査
ニ於テ債權ノ確定ニ至リタル後ニ非サレハ

財團ノ配當ニ與アルヲ得ス若夫レ即時ノ調
査ニ對シ管財人或ハ一債權者ノ異議ヲ唱フ
ル片ハ之ヲ斟酌セサルヘカラス何トナレハ
假調査ヲ為スノ時日ヲ之ニ與ハサルヘカラ
サレハナリ

第一千二十六條

債權ノ確定ハ承認又ハ裁判所ノ判決ヲ以テ之
ヲ為ス

調査會ニ於テ管財人ヨリモ又債權ノ確定シ若
クハ貸借對照表ニ掲ケタル債權者ヨリモ異議
ヲ申立テサルハ債權ハ承認ヲ得タルモノト
ス

管財人ノ債權ニ係ル承認又ハ異議ハ破産主任
官其管財人ニ代ハリテ之ヲ為ス

債權ノ確定ハ負債ノ金額ト之ト附帶スル優
先權トニ係ルモノニシテ或ハ自由ノ承認ヲ
以テシ或ハ裁判所ノ判決ヲ以テシ債權者及

管財人ハ承認ノ權アリ然レハ不正當ノ異議ヲ防カシ爲メ獨リ其債權ノ確定ヲ經又ハ少クモ貸方借方對照表ニ掲名セラレタル債權者ニ限り異議ヲ唱フルヲ許ス何トナレハ後^者ノ場合ニ於テハ眞ノ債權者タリト認ムルヲ得レハナリ破産者ニ至テハ自カラ異議ノ權ヲ有セス何トナレハ破産手續上ニ於テハ管財人及破産主任官之カ代人トナレハナリ獨逸倒産法第百卅二條佛國高法第四百九十四條及ニ白國高法第五百三條ニ依レハ破産者亦^ニ異議ノ權ヲ有ス是レ右云フ原則上ノ理由ヨリ論シ又惡意ノ異議ヲ以テ訴訟

ヲ増加スルノ弊ヨリ論シテ又嘉贊スヘキニ非ス唯々其陳述ヲ聽クハ既ニ充分ニシラ其要求果シテ裁判ニ付スヘキヤ否ヤハ管財人或ハ破産主任官ノ裁決ニ任スルヲ以テ至當トス

破産主任官亦タ管財人ノ要求ニ辱ルモノヲ除クノ外異議ノ權ヲ有スル能ハス何トナレハ是レ裁判官ノ公平ナル地位ニ適當スレハナリ然レハ債權ノ調査ニ参加シ脱漏無規ノ事ヲ糾シ法律上ノ意見ヲ陳述シ又異議ヲ爲レ或ハ爲サ、ル^トニ係リ管財人ニ對シ監督權ヲ施用スルハ禁スル所ニ非サルナリ

調査會ニ於テ起シタル異議ヲ取消シタル成
 ハ始ヨリ異議ナキモノト見做シ其要求ハ是
 認セラレタルモノトス異議ノ取消ハ續ヒテ
 調査辨論シタル後其會日ニ於テ之ヲ為ス
 ヲ得而シテ之ヲ取消ス者ハ之ヲ起シタル者
 ニ限ルヘキ一論ヲ換タス
 破産開始ノ前既ニ破産者訴訟ヲ受ケ未タ落
 着ニ至ラサルトナシトセズ今ヤ此ノ如キ訴
 訟ノ破産開始ノ為ニ中止セラレ該債權ハ
 他ノ債權ト同シク之ヲ届出ツヘキ一第九百
 八十五條及ニ第九百八十七條ニ依リ自カラ

明ナリ其訴訟ヲ管財人ニ對シ續行シ得ヘキ
 モノハ別除權ニ依リ辨償ヲ受ントスルノ訴
 訟ニ限ル何トナレハ此權アリテ始テ破産者
 ノ財産ニ別段ノ差押ヲ施スヲ得レハナリ蓋
 シ此ノ如キ債權亦タ之ヲ届出テ確定ヲ經サ
 ルヘカラスト雖モ管財人ニ對スル別段ノ手
 續ニ依ルニ非サレハ其辨償ヲ受クルヲ得サ
 ルナリ

第四十七條

異議ヲ受ケタル各債權ハ若シ其債權者之ヲ取
消サ、ルハハ破産裁判所公廷ニ於テ破産主任
官ノ演述ヲ聽キ成ル可ク合併シテ其判決ヲ為
ス可シ其辯論及ヒ判決ハ原告、被告ノ出頭セサ
ルハト雖モ之ヲ為ス但此判決ニ對シテハ故障
ヲ申立ツルヲ得ス

異議アル債權ヲ裁判所ノ判決ニ付スルハ普
通ノ原則ニ依リ自カラ然リ債權ノ異議ハ必
スシテ債權者ノ權利ヲ奪フニ非ス然レモ債
權者ノ要求アル一事ヲ以テ債務者ヲシテ支
拂義務アラシムルニ足ラス故ニ債權者ト債

務者トノ爭論ハ獨リ裁判所ノ判決ヲ俟テ定
マル者ナリ然レモ判決ヲ爲スニハ爲メニ必
要ナル手續ヲ履マサルハカラス此手續々破
産上ニ於テハ他ノ裁判ニ於ルカ如ク嚴重ナ
ラス乃チ適宜ヲ旨トシ直接ニ其實ヲ得ルヲ
以テ目的トス此點ニ就テモ任他裁判主義ヨ
リ寧ロ干渉裁判主義ヲ採リ雙方ノ申立及辨
論ニ其重ヲ歸セヌ

此裁判ノ目的ハ調査會ニ於テスルモノヨリ
一層ノ精悉ヲ加ヘ完全ノ裁判權ヲ以テ判決
ヲ下スニ在リ破産手續上ニ於ケル訴訟ノ此
ノ如ク特別ナルハ破産者自己ノ財産上ニ處

分能力及ニ訴訟能力ヲ失ヒ管財人ハ獨立ノ
債務者ト同一ノ自由ヲ以テ其能力ヲ施ス能
ハサレハナリ故ニ破産裁判所ハ自由ノ酌量
ヲ以テ調査判決レ敢テ相手雙方ノ申立ニ拘
係セラル、イナク主トシテ破産主任官公理
ノ負擔者ノ辨明ヲ探ル然レモ相手ヲ訊問シ
相手ノ請求ニ依リ證人ヲ糺シ及ニ都テ事實
ヲ査定シ權利起由ヲ調査スルニ精密公平ナ
ルヘキハ他ノ裁判ト異同アルヘカラス蓋シ
此ノ如キ簡便法ハ佛國商法第四百九十八條
及ニ白國商法第五百四條ニモ採用セラレ但
又佛國法ノ異ナル所ハ證據物採集ヲ以テ破

產主任官ニ任シ得ルノ一點トス是レ贊成ス
ヘキニ非ス何トナレハ法廷外ノ證據ヲ採集
ハ重要ノ利益ナク且裁判所ノ直接ニ事實ヲ
判定スルノ道ヲ絶ラハナリ
獨逸例產法ハ此ニ成ルヘク破産手續ノ特
質ヲ奪去シ破産裁判官ノ威權ヲ抑ヘント欲
シタルノ狀アリ故ニ同第百卅四條ニ異議ア
ル債權ハ其異議ヲ起シタル者ニ對シ尋常ノ
裁判法ニ依テ之ヲ判定ス可レトノ規則アリ
之カ為ニ異議アル債權ハ官權ヲ以テ裁判ニ
付スル能ハサルノ一點ニ於テ届出ノ効驗ヲ
奪ニ管財人タルト債權者タルヲ問ハス都テ

異議ヲ起ス者ハ通常訴訟法上ノ原則ニ循ヒ
自由ニ其債權ヲ左右スルヲ得何トナレハ一
債權者ニ對シテ得タル所ノ判決ハ他ノ債權
者ニ對シテモ効驗アレハナリ但タ届出ノ債
權額及ビ權利起由ヲ後ノ訴訟ニ於テ變更ス
ル能ハストノ一點ヲ以テ專恣ヲ抑エルノミ
債權ヲ裁判上ニテ確定スル此ノ如クナルハ
破産手續ノ目的ト調和セズ故ニ本案ハ之ヲ
採用セサルナリ(ガ)ルウエ「第五百七十三條
今マ過テ確定セザレタル債權ハ後日之ヲ異
議スルヲ得ヘキマノ問題アリ英國ニ於テハ
此權利ヲ管財人ニ與フ是レ其必要ナルハ証

エハカラス例ハ為替上ノ債權ニシテ調査
會ニ於テ承認セラレ其後為替ノ偽造タル
癸見セラレタリトモ、歟其債權ヲ正當ノモ
ノトシ財團ノ配當ニ加ハラシムルノ理ナシ
其訴訟上ノ確定ニ於テ證人虚言ヲ吐キタル
片ノ如キ亦々同シ故ニ既ニ承認若クハ判定
セラレタル債權ニ對シテ其後日異議ヲ唱フ
ルヲ得ヘキヤ論ヲ容レス況ンヤ破産手續終
結ノ後ニ於テモ其不正當ニ得タル配當額ヲ
取戻スヤニ於テヤ然レ凡此ニ特別ノ規則
ヲ設ルハ必要ニ非ス何トナレハ回復舊狀ニ
係ル普通ノ原則ヲ以テ充分トスレハナリ(千

法

八百七十七年獨逸訴訟法第五百四十三條
ニス高法第五百九十八條
第千二十五條ノ規則ハ此ニモ擬用シ以テ官
權ニ藉リ債權表及負債證書ニ裁判ヲ決シ記
入スヘシ此法ニ戻ル獨逸例產法第百卅四條
ノ末段ハ此點ニ於テモ届出ノ旨義及破産手
續ノ性質ニ背馳ス夫レ届出ノ破産上ニ於ケ
ルヤ出訴ニ代ルモノナルヲ以テ後更ニ出訴
ヲ為スヲ須ヒス承認ヲ以テ確定セラレタル
債權ヲ官權ヲ以テ表ニ記入シ關係人ニ告子
シタル片ハ裁判上ニ於テ確定セラレタル債
權ニ於テモ同シク然ルヘキハ自然ノ理ナリ

法

此判決ニ對シテ故障ヲ申立ルヲ得セシメ
サル亦タ迅速ヲ旨トスル破産手續ノ性質ニ
適スルモノニシテ故障ノ為メ事務ヲ繫留ス
ルヲ勿ラシムル為メナリ

第千二十八條

判決ハ成ル可ク債權者集會前ニ之ヲ為ス
要ス若シ之ヲ為ス不能ハ又ハ判決ニ對シテ
控訴ヲ為シタルハ裁判所ハ異議ヲ受ケタル
債權者ノ右集會ニ加ハルヲ許ス可キ又
幾許ノ金額ニ付キ加ハルヲ許ス可キヤ否ヲ
決定ス

債權者ノ優先權ノミカ異議ヲ受ケタルハ其
債權者ハ通常ノ債權者トシテ右集會ニ加ハル
ヲ得

是レ佛國高法第四百九十九條第五百一條白
國高法第五百二條第五百四條第五百五條獨

逸例產法第八十七條ニ揭ク此規則ハ債權ニ
異議ヲ受ケタル債權者ヲレテ債權者集會殊
ニ協解ノ會議ニ參加セシムル為メニ必要ナ
リ若シ此ノ如クセサレハ破産者ノ密計等ニ
出テ故ラニ債權ニ異議ヲ唱フル債權者アル
ニ方リ其要求者ハ詐偽ノ協解申立ヲ拒ムハ
キ平均カヲ失ナフニ至ルヘシ(テ)ラフール第
五冊第三百五十八條以下)
假ニ債權者ヲ集會ニ參與セシムル為メ債權
額ヲ定ムルハ債權者ノ可否權ヲ定ムルニ債
權ノ額ヲ標準トスルカ故ニ必要ナリ(第48
十三條)

第4二十九條

債權ヲ正當時期ニ届出テス又ハ債權ノ確定セ
サル債權者ハ以後ノ確定ニ因リテ為ス可キ財
團ノ配當ニノミ加ハルイヲ得然レハ異議ヲ受
ケテ訴訟中ニ在ル債權及ヒ届出並ニ調査ノ為
メ別段ノ期間ヲ定メラレタル在外國債權者ノ
債權ニ付テハ以前ノ配當ニ於テ其債權ニ歸ス
ル割前ヲ留存ス
届出期限ハ最初ノ届出期限ヲ越ツ者ヲ直ニ
財團ノ配當ヨリ除クカ如キ失權期限ニ非ス
之ヲ除クハ獨リ破産手續中金ク届出サル者
ニ限ル管財人或ハ裁判所ハ假令ニ其債權ノ

存スルヲ知り全ク異議ヲ容ルヘキモノニ非
ストスルモ官權ヲ以テ之ニ干涉スルヲ得ス
故ニ後レテ届出ル債權モ異議ナク受理スヘ
キナリ是レ權宜上ヨリシテ應ニ然ルヘキモ
ノナリ何トナレハ債權者カ破産ノ為メニ既
ニ蒙ル損害ニ加フルニ尚ホ期限ノ嚴ヲ以
テスヘカラサレハナリ又何トナレハ届出期
限ハ時効ニ非ス假令ニ届出テサルモ債權者
ハ則チ破産者ノ債權者タレハナリ又何トナ
レハ期限ノ遲滯ハ殊ニ遠方ノ債權者ニ於テ
不識不知生スルノ容易ナレハナリ此理由マ
明了ニシテ諸國ノ法律モ皆殆レト同一ニ其

後レタル届出ヲ許ス(佛國商法第五百二條第
五百三條第五百六十七條第五百六十八條獨
逸國商法第四百十條第五百十五條白國商法
第五百八條和蘭商法第八百七十三條第八百
七十四條千八百六十九年ノ英國法律第四十
三條)是ヲ以テ後レテ届出テタル債權ノ為メ
ニモ調査會ヲ設ケ後日確定シタル債權ハ以
前届出タルモノト同シク財團ノ配當ニ加ハ
ラシム然レモ其届出ヲ既往ニ溯ラシメス故
ニ以前ノ手續(殊ニ既ニ了リタル配當)ヲ之カ
為メニ動ナラズ能ハス且期限延滞ノ為メ更ニ
必要トナリタル手續殊ニ調査ノ費用ハ債權

者自ラ擔當ス可キハ勿論ニシテ權宜ニ稱フ
者トス但タ其債權既ニ確定セラレタルハ
此時ヨリ他ノ債權ト同一ノ權利ヲ得テ金額
ニ就キ配當ニ與カルヘキヤ論ヲ據タス若シ
夫レ期限ヲ愆ケタルノ故ニ非スレテ後レテ
確定セラレタル債權ハ初ヨリ注意ヲ加ヘサ
ルヘカラサルイモタ同レク權宜ノ然ラシム
ル所ニシテ即ケ時ヲ失ナハス届出タルモ異
議ヲ受ケタル債權及路程遠隔ノ為メ届出期
限ヲ猶豫セラレタル債權是レナリ若シ此ノ
如クセサレハ最モ疑ヲ容ルヘカラサル債權
ト雖モ一債權者ノ專恣ナル異議ノ為メニ其

權利ヲ失ナフニ至リ路程遠隔ノ債權者ヲシ
テ始ヨリ近所ノ債權者ヨリ不利ナル地位ニ
居ラシムルハ其正ヲ失ナフモナリ今夫レ
近所ノ債權者ヲシテ遠方ノ債權者ヲ長ク待
タシメサルカ為メニ之ニ短キ期限ヲ與フル
ハ是レ既ニ特遇ニシテ之ヲ以テ尚ホ其特遇
ナキ債權者ニ不利ヲ被ムラシムヘカラサル
ナリ此ニ掲ケタル債權者ノ為メ其割前ヲ留
存スルハ唯タ支拂方法ノ變化ト視サルハカ
ラス是ヲ以テ其金額ノ利子ハ該債權者ニ歸
シ財團ニ屬セス(ガ)ラワール第五冊第六百三
十七葉)今ヤ此留存ハ其權ナキ債權者ニ支拂

ハサラン為ノ、財團保全方法ニシテ該債權者ノ權利後ニ確定セラル、ニ於テハ其留存ノ事由復々存セズ其割前々元利トモ之レヲ支拂フヘキナリ若夫レ第九百八十九條ニ破産宣告ニ依リ財團ニ對シ利子ヲ止ムト定メル規則ハ爰ニ適用スルヲ得ス何トナレハ該規則ハ唯々届出ツヘキ債權ニ係ルモノニシテ財團ヨリ支拂フヘキ配當金ニ關セサレハナリ

佛國高法第四百九十七條及ヒ其他ノ法律ニ於テハ承認若クハ判決ノ對ニ債權者證言(ア)ツフニシヨシ(法式ヲ掲ケ之レ徴ケレハ

財團配當ニ加ハルヲ得サルモノトス本案ハ獨逸劇産法ニ倣ヒ此ノ如キ規則ヲ採ラス何トナレハ届出ノ債權ニシテ詐偽ナル片ハ重キ刑ヲ以テ論シ且眞ノ届出ニ對シテハ無用ノ法式タルニ止マレハナリ(サルウエ)第五百六十二條註三)

第二節 特種ノ債權者

第一千三十條

主タル債務者ノ破産ニ於テ届出テタル債權ハ
協諧契約ノ場合ト雖モ保證人其他ノ共同義務
者ニ對シ其金額ニ付テ之ヲ主張スルヲ得又
保證人又ハ共同義務者ハ主タル債務者ノ破産
ニ於テ其償還請求ヲ届出ツルヲ得然レモ主
タル債務者ノ為メニスル協諧契約ノ効果ニ從
フ

本條以下二條ハ破産ニ於ケル共同義務者ノ
關係ヲ論スルモノニシテ共同義務者トハ本
債務者ニ添フ保證人其他總テ同一ノ債權ニ

對シ連帶ノ責任アル者例ハ合名會社々員
及為替ニ於テ承諾人裏書裏渡人振出人並ニ
共同ノ過失ノ為メ損害賠償ノ義務アル者等
ヲ云フ本條ハ則チ本債務者其他抑モ義務ア
ル者破産シタルモ他ノ義務者ニ對シテモ
要求ヲ申立ルヲ得ヘシト定ム何トナレハ此
共同義務者ハ支拂ヲ為シテ初メテ其責ヲ免
レ唯タ一債務者ニ對スル要求アリタルカ為
メニ之ヲ免ル、モノニ非サレハナリ但タ債
權者其要求ノ一部分ヲ破産ニ於テ得タルモ
ハ他ノ義務者ヨリ受クヘキハ其不足額ニ止
マルヲ論ヲ俟タズ其之ニ反スルモ亦大同シ

今夫レ配當額ハ或ハ財團ノ多寡ニ因リ或ハ
協解ニ因テ定マルモニシテ協解ハ幾割ノ
支拂ヲ以テ破産者ノ財産ヲシテ其責ヲ免レ
シムルニ在リ此場合ニ於テモ共同義務者ニ
對シテハ其要求ノ全額ヲ請求スルヲ得ヘシ
例ハハ要求額ハ千弗ニシテ協解ノ為メ債權
者其五割即チ五百弗ヲ得タリトセン與假令
ニ協解ニ於テ破産者ニ對シテ要求ノ一半ヲ以
テ満足シ其一半ヲ棄捐シタルモ此一半ノ五
百弗ハ共同義務者ニ對シテ請求スルノ權アリ
何トナレハ協解ハ倒産手續ノ結果ニ依リ
個々ノ債權者ニ承諾セシメ以テ或ハ其意ニ

出テサル一多ク又保證人ニシテ債務者ノ支拂停止及之ヨリ生スル協解ノ為ニ其義務ヲ免ル、ニ於テハ保證ノ保證タル効驗消滅スレハナリ夫レ義務ヲ多數ニスルハ其一人ノ支拂ヲ為サス又ハ其支拂充分ナラサル場合ニ於テ債権者ニ安全ヲ與フルニ在リ故ニ共同義務者ハ破産者トノ協解ノ為ニ自己ノ義務ヲ免ル、ノ理由ナキナリ
保證人其他共同義務者ハ通常本債務者ニ對シ償還要求權ヲ有シ此要求權亦タ第九百八十八條ニ從ニ破産ニ方リ満期ノモノトシテ届出ルヲ得然レ凡此要求ハ有限ノ要求ニシ

テ保證人等ノ本債務者ニ代リ實ニ債権者ニ辨償シタル成ニ非サレハ生スル一ナシ若シ然ラズ或ハ唯タ一部分ヲ辨償シタル成ハ其要求亦タ効力ナク或ハ唯タ一部分ニ就テ効力アリ例ハ要求額千弗ニシテ保證人悉皆之ヲ支拂フタリトセハ保證人ハ破産ニ於テ千弗ノ償還要求ヲ為ス一ヲ得然レ凡債権者破産上ニテ四百弗ヲ得保證人ヨリ六百弗ヲ受ケタル成ハ唯タ其六百弗ニ就テ償還要求ヲ為ス一ヲ得ルニ止マル若夫レ協解契約アリテ債権者為メニ五割ヲ得タル成ハ保證人拘レク五割ヲ要求スルヲ得ス若シ然ラサレ

ハ財團ハ同一ノ要求ニ就キ債權者ト保證人
即チ償還要求者トニ對シニ回ノ支拂ヲ為シ
該要求ハ協解ニ於テ受クヘキモノニ超ユル
ノ配當ヲ受ルニ至リ破産者為メニ協解ノ利
益ヲ失ハシトス是レ許スハカラサルナ
ルヲ以テ本案ニ定ムル所ハ本債務者ノ破産
ニ於テ償還要求ヲ届出ルヲ得ルモ破産者ノ
為メニスル協解ノ効力ヲ動アス能ハストナ
ラニ在リ

本條ノ規則ハ佛國高法第五百四十四條第五
百四十五條白國高法第五百卅九條乃至第五
百四十一條獨逸劇產法第六十條第七十八
條ニ揭ク(「ブラワール」第五冊第四百卅四葉第
四百卅八葉及ニ第六百二葉以下「ザルウエ」
第四百卅三葉第六百八十三葉)

第一千三十一條

二人以上ノ共同義務者カ破産シタルモ其各
義務者ノ破産ニ於テ債權ノ全額ヲ届出ツル
ヲ得
各自ノ破産財團ノ間ニ於ケル償還請求權ハ之
ヲ主張スルヲ得不然レモ債權者カ受取ル割
前ノ額カ主タルモ及ニ從タルモヲ合セタ
ル債權ノ總額ヲ超過スルモ其超過額ハ共同
義務者中他ノ共同義務者ニ對シテ償還請求權
ヲ有スル者ノ財團ニ歸ス

前條ハ本債務者即チ共同義務者ノ一人破産
シタル場合ヲ論シ本條ハ共同義務者ノ内數

人若クハ總員ノ破産シタル場合ニ就テ定ム
此ニハ二個ノ結果ヲ論セサルヘカラス曰ク
各義務者ノ破産ニ債權ヲ届出ルヲ得即チ債
權者ハ其債權ノ全額ニ滿ルマテ各財團ヨリ
相當ノ配當ヲ要求スルヲ得曰ク破産外ニ在
テハ共同義務者ニシテ債權者ニ支拂フタル
者ハ他ノ義務者ニ對シテ償還要求ヲ為シ得
ヘシト雖モ甲財團ヨリ乙財團ニ對シテハ然
ルヲ得サルヲ例トスル是レナリ此第二ノ結
果ノ理由如何ニトナレハ各財團ハ其現在額
ノ割合ニ應シテ債務ヲ消却スルモニシテ
若シ甲財團ノ乙財團ニ對シテ償還要求ヲ為シ

得ヘキニ於テハ乙ハ其現在額ノ割合ニ超ユ
ル支拂ヲ為シ以テ同一ノ債權幾回モ辨償ヲ
受ケ破産配當ノ原則ヲ犯スニ至レハナリ例
ヘハ債權者ハ本債務者ノ破産ニ於テ債權額
ノ一割ヲ得保證人ノ破産ニ於テ其九割ヲ得
タリトセン歟是レ其債權ノ全額ニ止マレハ
債權者之ヲ以テ他ニ償還スルヲ須ヒス又保
證人ノ財團ハ既ニ支拂フタル九割ニ就キ本
債務者ノ財團ニ償還要求ヲ為スヲ得ス何ト
ナレハ償還要求權ハ全額ノ支拂ヲ為シタル
中ニ存スルモノニシテ破産上ノ割前ハ此ノ
如キ支拂ト視ルヘカラス別産ハ全額支拂ノ

妨障トナリタレハナリ(佛國高法第五百四十
二條第五百四十三條白國高法第五百卅七條
第五百三十八條獨逸例產法第六十一條)爰ニ
例外トスヘキハ各財團ノ全割前額過上ヲ生
シタルモ是ナリ此過上ハ他ノ共同義務者ニ
對シテ償還要求権ヲ有スル者ノ財團ニ組入
ルハレ例ハ本債務者ノ財團ニ對シテハ保
證人ノ財團ニ為替義務者ノ財團ニ對シテハ
最後ノ裏書讓渡人ノ財團ニ組入ルヘキナリ
又償還要求ハ債権ノ届出ナキ財團ニ對シテ
之ヲ為ス¹ヲ得ル論ヲ族タス若シ然ラサレ
ハ此財團品ハ為メニ利得ヲ得他ノ財團ヲ害

スルニ至ルヘシ(ウ¹イルモウスキ)第百八十
八葉註三)蓋シ此例外ハ權宜ヨリ生スル所ナ
リ
債権者ハ各財團ニ對シ債権ノ全部ヲ届出ル
ヲ得即チ全要求額ニ就テ相當ノ割前ヲ受ケ
徒ニ他ニ辨償ヲ受ケタルノ殘餘ニ就テ割前
ヲ受ルニ止マラス例ハ要求額千弗ニシテ
甲財團ノ配當額五百弗ナリトセニ與ヒ財團
ニ對シテハ尚ホ千弗ノ届出ヲ為スヲ得ハク
必スレモ五百弗ニ限ラサルナリ故ニ若シ乙
財團ノ割前五割ナルモ五百弗ヲ得ハク不
足額ノ届出ヲ為シタルモ於ルカ如ク二百

五十弗ヲ得ルニ止ラサルナリ(可)ラワール第
五冊第六百二葉「ガ」ルウエ」第四百廿八葉

第一千三十二條

左ニ掲クル債權ハ届出及ヒ確定ニ関スル規定ニ從テテヲ要セス

第一 裁判費用、管理費用其他破産手續上ノ費用

第二 公ノ手数料及ヒ諸税

第三 管財人カ財團ノ為メニ負擔シタル義務ヨリ生スル債權

右債權ハ破産主任官ノ指圖ニ從ヒ通常ノ方法ヲ以テ財團ノ現額ヨリ之ヲ支拂フ

届出及ヒ確定ノ規則ハ主トシテ財團ニ對シテ要求ヲ為スノ時期及法式ト要求ノ承認若

クハ審判ヲ以テスル確定ニ係ル是ヲ以テ届
出義務アル債權ニシテ右ノ規則ヲ踐マサレ
ハ財團ヨリ辨償ヲ受ルノ權利ヲ失ナフ且個
々ノ債權者ハ各債權ニ對シテ異議ヲ唱フル
ノ權アリ其債權者ヲシテ訴訟ニ依リ其權利
ヲ保護スルノ乙ムハカラサルニ至ラシム調
査會ニ於テ然ルハキ人々ノ立會ヲ以テ法式
的ノ調査ヲ為ス一亦タ右規則ノ一タリ然レ
氏債權ニシテ一モ疑義ナク容易ニ判定スヘ
キモノ亦タ甚タ多ク之ニ他ノ債權ニ於ルト
同一ノ規則ヲ用ユルハ便宜ヲ失ナフ即チ破
産ノ為ノ始ヲ生シ管財人及ヒ破産主任官ノ

自カラ熟知スル債權或ハ行政上ニ緣田スル
カ為メ抑モ通常ノ裁判處分ニ付スルニ適セ
ス其爭論アルニ方テハ多クハ行政處分ヲ以
テ裁定スヘキ所ノ債權是レナリ本案ニ於テ
此ニ算スルモノ左ノ如シ
一、破産裁判費用及管理費用即チ管財人ノ報
酬破産者及ヒ其他ノ人々(財産目錄調製ノ際
ニ助力シタル者等)ニ與ヘタル手當金營業績
行費(職工賃勞役賃等)其他裁判宣告等ノ公告
料破産者及ヒ其家族ノ扶助料等
二、公然ノ手数料及ヒ税金例ハ郵便料電信
料測量費地稅關稅等但シ獨逸劇產法第五十

四條第二項ニ依レハ此債權ヲ以テ届出義務
アル債權ニ算ス佛國商法第五百六十五條ニ
ハ特權アル債權(佛國民法第二千一百一條第二
千百五條ニ依ル但上納金主トシテ爰ニ屬ス)
ハ財團配當ノ前ニ之ヲ支拂フヘシト為ス是
レ其理義分明ナラス蓋シ上納金ヲシテ届出
ノ義務ヲ免レシムルハ特許タルト勿論ナリ
ト雖モ是レ上納金ニ抑モ他ノ債權ニ拔ンテ
多少獨歩ノ優先權ヲ與ヘ何レノ國ニ於テモ
之ニ別除權ヲ付シ他ノ債權ニ先テ辨償スヘ
キモト為レ(第千五十條)且私益ノ為メニス
ル爭論ヲ以テ公事上ノ支拂ヲ妨クル能ハサ

ルヨリ出ル所ナリ加之是レ多クハ少額ニ止
マリ之ニ對シ爭論ヲ開クノ因縁少ナシ而シ
テ此上納金ノ延納ニ屬スルト刷產手續中ニ
滿期トナルモノトニ於テ差アルトナク又國
ノ債權ニ係ルト地方團結ノ債權ニ係ルトノ
為メニ別アルトナシ若夫レ右ノ外ナル國ノ
債權例ハ官金監守盜或ハ在金不足等ノ為
メ官吏ニ對スル債權ノ如キハ此ニ屬セズ何
トナレハ此ノ如キ債權ニ特權アラシムルノ
理由充分ナラス且國ハ保證金ヲ以テ預防ス
ルト多ケレハナリ(第百四十二條)
三、管理人ノ財團ノ為メ引受ケタル義務ニ對

スル債権ハ破産上ノ債権ニ屬セサルヲ明ナ
リ何トナレハ石ノ義務ハ即チ財團ノ義務ニ
シテ財團ハ破産ノ形狀中ニ在ルニ非ス且財
團ノ財團タル資格ニ對シテハ取引ヲ為ス者
ナケレハナリ此ニ屬スルモノハ管財人ノ財
團ノ為メニ受ケタル貸付其他取引上ヨリ生
シタル債権是レナリ又第九百九十三條ニ掲
ケタル雙務契約ニシテ管財人ノ財團ノ為メ
新ニ取結ヒ又ハ繼續シタル所ノモノヨリ生
スル債権モ此ニ算入スル例ハ管財人カ破産
者ノ取結ヒタル貸借契約ヲ續クキハ破産宣
告ノ後満期トナリタル貸借料ヲ此ニ算スル

カ如シ

獨逸倒産法第五十條乃至第五十二條ハ財團
ノ費用ト其債務トヲ破産上ノ債務ト區別シ
大要本條ノ第一項ニ掲ケタルモノヲ財團ノ
費用ニ算シ第三項ニ掲ケタルモノヲ財團ノ
債務ト為シ第二項ニ記スルモノヲ以テ破産
上ノ債務ト為ス而シテ此破産上ノ債務ハ該
破産法第十條ニ隨ヒ一個人ノ債権ニ於ルト
同一ノ規則ニ依ラシム本案ハ此ノ如ク論理
ニ恰當セサル所ノ作為ノ名稱ヲ立テス(サル
ウエ)「第三百八十三條以下」此ニ屬スル諸債
權ヲ單ニ列記シタリ若夫レ財團ニシテ本條

ニ掲ケタル債権者ニ辨償スルニ足ラサル片
ハ此列記ノ順序ヲ以テ辨償スヘキナリ(佛國
高法第五百六十五條白國高法第五百六十一
條)

然レ凡此ニ記スル債権ヲシテ届出ト確定ト
ヲ免レシケルカ為メニ併セテ一モ調査スル
トナク唯々其請求ニ依テ支拂フヘシト為ス
ヘカラス管財人ハ忠実ナル差配人ノ如ク慎
ニテ調査ヲ加ヘ其裁決ヲ下ス者ハ破産主任
官トス若レ此裁決ニ服セサル片ハ財團ノ代
人タル管財人ヲ相手トシ訴訟ヲ起スヲ得ヘ
シ而シテ此等ノ債権ハ何時ニテモ之ヲ管財

人ニ届出テ現在金アル片ハ直チニ之ヲ支拂
フヲ得ヘシ

第一千三十三條

破産者ニ科シタル罰金及ニ破産手續ニ加ハリタルニ因リテ債権者ニ生シタル費用ハ財團ニ對シテ之ヲ請求スルヲ得ス

是レ獨逸劇産法第五十六條ニ掲ケル所ニシテ罰金ニハ没収及違約金其他ノ償金ヲ算入セズ唯々刑法上若クハ警察上ノ有罪ナル行為ニ由リ破産者ノ科セラレタル罰ニ限ルニ稱スルカキ此罰金ハ財團ニ對シテ要求スルヲ得ス何トナレハ財團ハ破産宣告ニ依リ専ラ債権者ノ辨償ニ供スヘキモノニシテ若シ罰金ヲ之ヨリ徴スルハ破産者ヲ罰スルニ非ス

シテ債権者ヲ罰スルニ同シケレハナリ蓋シ
之カ為メニ破産者ノ無罰ニシテ己ムノ結果
ヲ生スルニ至ラス何トナレハ罰金ノ徴スヘ
キモノナケレハ禁錮ニ代ルテ普通ノ原則ナ
レハナリ若夫レ違約金其他ノ償金ハ損害ノ
賠償ニ近キモノナレハ之ヲ破産上ニ要求ス
ルハ禁スヘキ所ニ非ルナリ
破産ノ為メニ債権者ノ拂フタル費用ニシテ
破産開始前ニ生シタルニ非サルモノハ財團
ヨリ要求スルヲ得ス何トナレハ債権者ハ破
産開始ノ際ニ有スル債権ノ割合ニ應シテ財
團ヨリ割前ヲ要求スルヲ得レハナリ此割前

ハ債権者ノ各異同アル費用ノ為メニ變スル
テ能ハサルモノニシテ蓋シ此ノ如クナル所
ハ直接ノ元金損失ニ加フルニ他ノ一損失ヲ
以テスルカ如シト雖モ是レ己ヲ得サル所ニ
シテ為メニ規則ヲ以テ不用ノ費用ヲ避クハ
キ間接ノ牽制ヲ立ツ今右ノ費用ニ算スルモ
ノハ殊ニ代人費用、旅費、訴訟入費等是ナリ今
夫レ届出タル債権ニ對シ異議ヲ唱フル債権
者ニシテ為メニ生シタル訴訟入費ヲ財團ニ
負ハシムルヲ得ルニ於テハ彌々輕率不良ノ
異議申立ヲ誘起スルニ至ラントス

第一千三十四條

婦ハ其夫ノ財團ニ對シテ法律明約又ハ疑ナキ
慣例ニ依リ婦ノ特有ニ歸スル所有權ヨリ生ス
ル債權ノミヲ主張スルヲ得

破産シタル夫ノ財産ニ對シ其婦ノ債權ヲ申
立ルヲニ就テハ婦タルモノ通常自己ノ財産
ヲ有セズ且道義上並ニ法律上ノ理由ヨリシ
テ其夫ト運命ヲ偕ニシ夫ノ破産ノ不幸ハ其
婦併セテ擔任スヘシトノ主義ヲ以テ本案ノ
根據トス若夫レ之ニ反シ婦ニ特別不羈ノ財
産權ヲ與ヘ且其夫ニ對スル債權ヲ他ノ債權
者ニ拔ニテ特遇スルカ如キハ本然ノ理ニ在

博ルニ止マラス日本ノ風俗及主義ニ稱ハサルモノナリ

婦ニシテ例外ニ獨有ノ財産アルトナシトセ
ス其財産トハ嫁娶ノ際持參シタルモノ或ハ
嫁娶ノ後遺產相續贈遺贈與若クハ自營等ニ
由テ得タルモノ是レナリ此ノ如キ財産ハ第
千十四條ニ從ヒ夫ノ財團ヨリ之ヲ分別シ婦
ノ自有ト為スヲ得ヘキヤ疑ヲ容レス之ヲ以
テ夫ノ債權者ニ辨償スルノ義務ナシ然レ氏
若シ其財産タルトテ爭フ者アラハ婦ハ其證
據ヲ立テサルヘカラス而シテ其證據ハ夫婦
ノ間ニ存スル明白ノ契約ヲ以テスルヲ得ヘ

レ何トナレハ此契約ナケレハ夫ニ屬シタリ
ト視ルヘケレハナリ又疑ヲ容ルヘカラサル
慣例ニ依ルモ可ナリ即ケ日本ニ於ケルカ如
ク専ラ婦ノ使用ニ供スル衣類飾品等ニ係ル
是レナリ(佛國商法第五百六十條)此特別ナル
婦ノ財産單ニテ婦ノ自カラ得タルモノナル
ト父母ヨリ得タルモノナルト他人ヨリ得タ
ルモノナルトハ一モ問フトナシ又夫ヨリ得
タルモノモ共ニ然リ何トナレハ夫ノ配遇中
或ハ配遇前其婦ニ贈與ヲ為スハ禁スル所ニ
非サレハナリ但タ隨意ノ贈與ニ係ル第九百
九十條ハ婦ニモ適用スヘキノミ

然レ氏婦ハ所有者トナルニ止マラス債権者
トナリテ夫ニ對スル一アリ本條ハ即チ此場
合ニ係ルモノニシテ其定ムル所ハ婦ハ一己
ノ所有權ヨリ生スル債権ニ限リ夫ノ破産ニ
於テ申立ルヲ得ヘシト云フニ有リ例ヘハ夫
ニ自己ノ財産ヲ以テ貸付ヲ為シ又ハ自己ノ
物件ヲ夫ニ賣却スル一アリ又ハ自己ノ財産
ノ管理及換價ヲ夫ニ托シタルヨリ其物呂ノ
還與又ハ代價ノ辨償ヲ要求スル一アリ此ノ
如キ債権ハ他ノ債権者ニ同シク之ヲ届出ル
ヲ得ヘシ然レ氏自己ノ財産ニ關係ヲ有セサ
ル債権ニ在テハ然ラズ即チ贈與ノ要求又ハ

自己ノ財産ヲ以テシタル一ヲ證明スル能ハ
サル所ノ貸付ニ係ル債権又ハ獨リ自己ニ屬
スルニ非サル物呂ノ代價要求等是レナリ而
シテ婦ハ其正當ノ要求ニ就テモ優先權ヲ有
セス故ニ他ノ債権者ト同一ノ割合ヲ以テ辨
償ヲ求ケルヲ得ルニ止マル但タ夫ヨリ明ニ
書入質等ノ抵當ヲ差入タル成テ別トスルノ
事ナリ
第十四章 第二節
今ヤ本案ハ此ノ如ク簡單公平ノ方法ヲ以テ
夫ノ破産シタル場合ニ於テ婦ノ財産權ヲ保
護セシトシタルモノニシテ一方ニハ婦ヲシ
テ全ク無權利ノ地ニ居リ夫ノ浪費若クハ不

正ノ犧牲ト為ラシムヘカラス一方ハ之ニ
不當ノ特權ヲ與ヘテ他ノ債權者ニ損害ヲ蒙
ムラシメ其夫ヲシテ理由ナク夫婦間ノ財産
ヲ救護スル不正當ノ利益ヲ得セシメサルヲ
要スルナリ

諸國法律ノ此點ニ於ケルヤ大体ニ就テハ粗
相同シト雖モ其異ナルヲ亦々ナシトセス然
レ氏其異ナル所復々論ヲ費ヤスニ足ラス其
國ニ行ナハル、夫婦間ノ財産ニ係ル規則ト
相連結シ此ニ之ヲ細論スル能ハサルナリ(佛
國高法第五百五十七條乃左第五百六十四條
白國高法第五百五十三條乃至第五百六十條

獨逸制產第廿五條第卅七條「サルウエ」第二
百四十條以下)

第三節 債權者集會

第三十五條

債權者集會ハ破産主任官之ヲ招集シ及ヒ之ヲ指揮ス其招集ハ會議ノ事項ヲ明示スル公告ヲ以テ之ヲ為ス

其集會ハ管財人、債權ノ確定シタル債權者及ヒ第千二十八條ニ依リ参加スルヲ得ヘキ債權者ヨリ成立ス然レモ優先權ノ確定シタル債權者ハ其優先權ヲ拋棄シタル限度又ハ優先權ヲ行フニ當リ不足アル可シト推定セラル、限度ニ於テノミ参加ス

債權者ハ代理人ヲ差出スルヲ得

破産者ハ之ヲ集會ニ呼出スヲ得
本審ニ從ヘハ債權者ハ大体唯タ訴訟ノ相手
タル權利ヲ有ス即チ自己ノ權利ヲ届出テ及
辨護シ得ルニ止マリ手續上ニ一モ威權ヲ有
セズ破産主任官及ヒ裁判所該手續ヲ主掌ス
夫レ破産手續ハ裁判手續ニシテ國ノ裁判權
ハ以テ管財能力ヲ失フタル破産者ニ代ル
モノトシ破産者ノ權利及ヒ財産處分權ヲ債
權者全体ニ移スノ主義ハ一切之ヲ採ラス故
ニ債權者ヲシテ財産ノ管理ニ加ハラシメ本
來裁判所及ヒ破産主任官ニ歸スル管財人監
督權ヲ之ニ與フルノ因由ナシ

佛國、英國及

獨逸ノ法律ニ從ヘハ眞管財人ハ債權者之ヲ
撰定シ又英獨ノ法律ハ管理上重要ナル事件
ニ在テハ債權者或ハ債權者總代ノ同意ヲ要
ストナス(獨逸倒産法第百十八條以下第百二
十五條英國千八百六十九年ノ法律第十四條
及ヒ第二十條)蓋シ此等ノ法律ハ學世自治政
ヲ稱揚シ此主義ヲ裁判手續ニモ移スヘシト
信レタリレバニ起リタルモノニシテ此主義
タル本來論スルニ足ラサルノミナラス總債
權者ヲシテ(其債權ノ割合ヲ以テ)債務者ノ財
産ニ想像上ノ共有權アラシメノ債權者ノ本義
ニ戻ル所ノ擬定ヲ以テ右主義ノ根據トスル

同書

其當ヲ得タリト謂フヘカラス之ヲ實際ニ
徴スルモ技術アル有驗常職ノ管財人ヲシテ
其財産ヲ管理セシメ裁判所ヲシテ之ヲ監督
セシムルハ隨意若クハ偶然ニ出ル債權者ノ
多數決ヲ以テスルヨリ遙カニ債權者ノ為メ
利ヲリトスル所ナリ故ニ債權者集會ハ本案
ニ依リ破産主任官ノ召集ヲ俟タシメ該官ハ
自己ノ量見又ハ管財人ノ申立ニ依リ債權者
ニ方案ヲ示シ債權者ノ承諾ヲ得テ自己又ハ
管財人ノ為メニ償還要求ヲ防クノ權アリ是
レ特ニ重要ナル管理事件ニシテ債權者ノ損
失トナルノ憂アルモニ就テ然ルモノナリ

ト雖モ該官ハ必スシモ之ヲ為スノ義務アル
ニ非ス法律上ノ權限内ニ在テ自己ノ責任ヲ
以テ事ヲ處スルヲ得ルナリ然リト雖モ債權
者集會ノ緊要ナルモハ法律ヲ以テ之ヲ定
ム例ヘハ債權者ト債務者ト協解契約ヲ結
ブニ係ル第一集會是レナリ故ニ債權者集會
ヲ関クノ原則ヲ定ムルハ欠クヘカラス佛國
商法第五百四條乃至第五百六條白國商法第
五百九條乃至第五百十一條ニ於テハ協解會
議(コンコルダト)ノ規則中ニ之ヲ掲ク然レ
此是レ第一集會ニ限ラズ自餘ノ會ニモ適用
スヘキモノナルヲ以テ獨逸倒産法第八十五

條以下ニ於ケルカ如ク特別ノ條款ヲ設ケテ之ヲ定メ殊ニ債權者ノ權利実行ニ關スル規則ト連接セシムルヲ以テ便宜トス此規則ハ大体ニ於テハ既ニ採用シタル諸國ノ法律ト同シ(英國千八百六十九年ノ法律第廿六條)仍ホ其詳細ニ至テ論スヘキモノ左ノ如ク

集會ノ召集ハ破產主任官公告ヲ以テ之ヲ為ス此ニ例外トナルモノハ第一集會ニシテ是ノ第千二十三條ニ從ヒ特別ノ書面ヲ以テ所在分明ナル債權者ヲ呼出ス(在リ)佛國ニ於テモ亦然リトス(ゴ)ラワー^ル第五冊第百五葉佛國

商法第四百九十二條以テ其召集ノ破產主任官ノ手ニ出ラタルト該官ノ命ニ依リ裁判書記ノ書面ヲ以テシタルトハ一モ問フ^テナシ右ノ外ナル集會ニハ特別ノ召集ヲ要セス何トナレハ其召集ヲ為サ^ルニ居クモ該官ノ隨意タレハナリ獨逸例產法第八十五條ニ依リ管財人、債權者總代又ハ一定數ノ債權者ヨリ請求^スル^ルハ召集スルノ義務アリト為ス此ノ如キ義務上ノ召集ハ本案主義ニ依シハ其理由ナシ況ニヤ債權者ハ破產主任官ニ此ノ如キ申立ヲ為スヲ得ルモノニシテ又之ノ債權者ノ議決ニ付スルノ準備ヲ為スハ破

產主任官ノ自由ニアルニ於テ又破産者
ヲ呼出スハ辦解等ノ為メ其臨席ヲ必要トス
ト時ニ於テス

優先權ヲ有スル者ニ關スル規則ハ其者特別
ノ抵當物ヲ得タルカ為メ一般財團ノ配當
ニ與カラズ且之ニ就テ可否ノ權ヲ有スル
ヲ得サルニ因リテ立テタリ今ヤ其債權ニ異
議ヲ受ケタルニ第千二十八條ニ從ヒ他ノ
債權者ト同シク假リニ會議ニ許容セラル唯
タ其優先權ノミニ異議ヲ受ケタルニ少ナ
クモ之ヲ尋常ノ債權者ト看做シ之ト同一ノ
權利ヲ得セシムハニ佛國商法第五百一條英

國千八百六十九年ノ法律第十六條第四項又
右ノ債權者ト同視スヘキ者ハ優先權ヲ任意
拋棄シタルモ又ハ優先權ヲ執行シタルモ
全額ノ辦償ヲ受ケサルモ是レナリ何トナ
レハ其不足額ニ就テハ第九百九十九條ニ從
ヒ尋常ノ債權者ト看做シ得ヘキモノナレハ
ナリ獨逸倒産法第八十八條

第一千三十六條

決議ハ出席シタル債權者ノ過半数ヲ以テ為ス
ヲ通例トス其過半数ハ出席員ノ有スル債權額
ノ半ヨリ多キ額ニ當ルトヲ要ス

是レ獨逸例_法第八十六條佛國_{商法}第五百

七條白國_{高法}第五百十五條英國_{千八百六十}

九年_{ノ法律}第十六條第八項_掲ク右佛國_以

下_{ノ法律}ニ依レバ_{債權額}ノ四分三ヲ要スト

雖モ_為ノ決ヲ取ル_{ノ或}ハ難キ_{トアル}ノ一

點ヨリ論シテモ_{通常集會}ニ於テハ簡單ノ多

數ヲ用ユルヲ便宜トス_{ルカ如}是ヲ以テ會

議ノ決ニ効力アラシムルニハ此法ニ依ルル

ハ必要ニアリ曰ク現在員中ノ過半数ニ曰ク此過半数ニ加ヘテ仍ホ現在員債權總額ノ過半数以上ナルト是レナリ其一アリテ其二ナケレハ不充分ニシテ今夫レ債權者二人若クハ三人ニシテ債權額ノ多数ヲ占ムルモ他ノ債權者二十人或ハ三十人ニ對シテ勝ヲ占ル能ハス是レ人員ノ多数ヲ以テ小債權者ノ利益ヲ保護シ人員上ノ勢力ヲ會議ニ於テ有セシムルモナリ

第千三十七條

集會ニ於テハ破產主任官ハ破產手續ノ從來ノ成行ニ付テノ報告ヲ為シ管財人ハ管財ノ處理其結果及ヒ財團ノ現況ニ付テノ報告ヲ為ス集會ハ右ノ報告ニ付テ決議ヲ為シ若シ破產主任官又ハ管財人ノ意見アリタルハ其意見及ヒ債權者ノ為シタル申立又ハ破產主任官ノ認可ヲ受ケテ破產者ノ為シタル申立ニ付テ決議ヲ為ス可シ此等ノ決議ハ裁判所ノ認可ヲ受ケルナラ要ス

本條ハ債權者集會ノ通常職掌トスル目的ヲ示スモナリニシテ佛國商法第五百六條第五百

三十一條(本條)本案ニ於テハ法律上又ハ裁判上其
 手續ノ經歷ニ就キ破産主任官ニ又管理ノ結
 果及ニ處置ニ就キ管財人ニ報告ヲ擔任セシ
 ムルヲ以テ便宜ニ適スルモノト視タリ破産
 者ハ呼出ヲ受クル時ニ限り申立ヲ為スヲ得
 ヘシ而シテ其申立亦タ破産主任官ノ許可ヲ
 要ス若シ然ラザレバ往々採用スヘカラサル
 不當ノ申立ヲナス患アリ集會ノ議決ハ裁判
 所ノ許可ヲ受クヘキモノニシテ(獨逸)倒産法
 第九十一條多數ノ為メニ壓抑セラレタル債
 權者又ハ管財人ノ此議決ニ對シ異議ヲ唱ヘ
 得ルハ論ヲ俟タス之ヲ特別ニ掲ルノ必要ナ

シ又裁判所ハ此ノ如キ異議ナキハト雖モ其
 許可ヲ與ヘサルヲ得ヘシ何トナレハ權利法
 律及債權者一般ノ利益ヲ保護スルハ裁判所
 ノ職權ニ在レハナリ英國ノ四百六十九年ノ
 法律第十四條ニ於テモ正當ノ理由アル時ニ
 債權者ノ議決ヲ破毀スルノ權ヲ裁判所ニ與
 ヘタリ又佛國高法第五百三十六條ニ於テハ
 第一ノ集會ヲ除クノ外債權者ヲ呼出スヲ
 以テ破産主任官ノ了見ニ任シタリ故ニ債權
 者ノ議決ハ獨立ノ効力ヲ有スル能ハサルナ

第七章 協諧契約

第一千三十八條

法律上ノ義務ヲ履行シタル破産者ニシテ有罪
破産ノ判決ヲ受ケヌ又其審問中ニ在ラサル者
ハ破産主任官ノ認可ヲ受ケ第一ノ集會ニ於テ
債權者ニ協諧契約ヲ提供スルヲ得又十分ノ
理由アル内ハ以後ノ集會ニ於テモ之ヲ提供ス
ルヲ得然レモ其提供ハ一回ニ限ル
第一ノ集會ハ普通ノ調査會ヨリ四週日後ニ之
ヲ為ス協諧契約ノ申立書ハ少クモ集會ノ二
十日前ニ之ヲ裁判所ニ差出し裁判所ハ之ヲ公
衆ノ展閱ニ供シ且其旨ヲ公告ス可シ

夫レ破産協諧ハニ（ア）ツコルト（イ）コルト（ウ）コルト（エ）コルト（オ）コルト（カ）コルト（キ）コルト（ク）コルト（ケ）コルト（コ）コルト（カ）コルト（キ）コルト（ク）コルト（ケ）コルト（コ）コルト（カ）コルト（キ）コルト（ク）コルト（ケ）コルト（コ）

（人）法律ニ在ラモ是認スル所ニシテ佛國商法

第五百七條乃至第五百二十六條白國商法第

五百九條乃至第五百二十七條獨逸國產法第

百六十條乃至第百八十七條和蘭商法第百

三十五條乃至第百五十一條西國商法第百

百四十七條乃至第百六十七條澳國商法第

第二百七條乃至第二百四十五條英國商法第

百九十九年ノ法律第百八十條第十項第百二十五

條第百二十六條此協諧亦々他ノ和解ト同シク

債務者其債權者ニ對シ某義務ヲ引受ケ其債

務ヲ免ル、効カアリ即チ協諧ハ通常債務

ノ幾割ヲ支拂ニ殘額ノ義務ヲ免ル、在リ

例ハ各債權者ニ五割或ハ七割五分ヲ支拂

ニ殘額五割又ハ二割五分ヲ免除セラル然レ

尺支拂延期或ハ利子ノ免除ヲ以テスルテア

リ故ニ協諧アルヤ債權者ニ於テ多少免宥ス

ル所アリ債務者ニ於テハ新義務ヲ踐行スル

テ明約シ通常保證人又ハ其他ノ方法ヲ以

テ之ヲ擔保スルヲ要ス其他協諧ノ効カハ債

務者自己ノ財產處分及ニ管理權ヲ復スルヲ

常トス然レ尺此點ニ就テ制限スルテアリ例

ハ債務者ヲ債權者ノ監視ニ付シ或ハ某物

ハ債務者ヲ債權者ノ監視ニ付シ或ハ某物

品ヲ債権者ノ手中ニ留置スルヲ止マ
ラス其免除ヲ受クル為メ現存ノ財産ヲ悉皆
債権者ニ引渡スル亦タナシトセズ此種類ノ
協諧ハ佛國ニ於テ(1)コンコンダート、バル、フバ
シド(2)千八百五十六年七月十七日ノ法律ヲ
以テ特定セリト雖モ是レ亦タ他ノ協諧ト同
一ノ事由ト効カトヲ有シ更ニ之ニ就テ規則
ヲ立ルハ必要ニ非ス

債権者ハ債務者ト自由ニ協諧契約ヲ取結フ
ヲ得ヘシト雖モ法律上ノ制限ハ之ヲ守ラサ
ルヘカラス此制限ヤ不法無道ノ協諧ヲ禁シ
輕慮或ハ壓制ニ出テタル債権者ノ同意ヲ妨

クルヲ以テ目的トス

今ヤ裁判所ニ於テ債務者ノ全財産ヲ管理ス
ルニ於テハ債権者ノ要求ヲ充ツルヲ大ニ確
實完全ナルヘク且債権者ハ必スシテ免除ヲ
為スノ義務アルニ非ス然ルニ如何ナル理由
アリテ債権者ハ協諧ヲ承諾スルニ至ルヤト
ノ問題アラシ蓋シ協諧ハ債権者ニモ幾多ノ
利益ヲ與フル者ニシテ今裁判所上ノ管理ヲ
止ムルハ財團ノ多分ヲ消糜スヘキノ費用
ヲ節シ又債務者ハ自己ノ管理ヲ以テスレハ
即時賣却ノ無限義務ヲ免レテ財團ノ現在額
ヲ増加シ其他協諧アルニ非カレハ得ヘカラ

ナル所ノ友人親族ノ扶助及前貸ヲ受クル
アルヘシ加之債権者ニ於テ免除スルモノ取
引上ノ斟酌ヨリ生スルトナシトセズ殊ニ債
務者ノ罪過ナク全ク偶然ノ不幸ノ為メ破産
ニ至リタル場合ノ如キ最モ然リトス
又本案ノ主義ヨリ論スレハ破産上ノ協諾ハ
必スシモ立法者ノ特遇スルモノニ非ス本案
ハ此點ニ就テ最近ノ法律ヲ採ラス之ヲ実験
ニ徴スルニ債権者ハ幾割ノ辨償ヲ受ルヲ以
テ既ニ其幸トシ煩雜ナル裁判所分ヲ嫌ヒ其
免除ヨリ生スル一般ノ結果ハ其注意スル所
ニ非サルヲ以テ協諾ヲ為スト甚タ多シ柏林

府ニ於テハ千八百五十五年乃至千八百七十
三年ノ十八年間ニ府裁判所ノ處分ニ屬シタ
ル破産中百分ノ四十八協諾ヲ以テ落着シ其
配當ニ至リタルモノハ百分ノ四十八ニ止マ
リ即チ大凡一半ハ協諾ヲ以テ終レリ而シテ
協諾ノ成ルハ多數決ノ壓制ニ出テ或ハ債権
者ノ親友中切情アル兩三輩ノ德憑及ヒ多數
債権者ノ無事柔弱ニ生スルト多ク且會議ニ
於テハ主唱者ノ提案スル所多クハ採用セラ
ルモノナリ何トナレハ總會員ノ精神及德
義上ノ力ハ常ニ一二會員ノ才智勇敢ニ敵ス
ル能ハサレハナリ故ニ破産者ハ和解ニ依リ

法律ノ嚴酷ヲ免カル、ヲ得ルノ容易ナリ然
レ凡是レ希望スヘキ結果ニ非ス許多ノ債權
者ハ之ヲ為ノ巨額ノ資本ヲ失ヒ協諧ノ恩典
ハ以テ多少債務者ノ疎虞ナル行為ヲ是認シ
惡心アル商人ヲシテ詐偽倒産ニ誘ナフ媒介
トナル何トナレハ二三回ノ破産協諧ハ以テ
富人トナルノ本タレハナリ蓋シ近來破産者
ノ數大ニ増加セシモノハ法律ヲ以テ協諧ヲ
特遇シタルト與カリテ力アリト云フヘシ故
ニ本案ニ於テハ普通殊ニ最近ノ法律ニ於テ
ルヨリ一層協諧ノ規則ヲ嚴ニスル所アルヲ
以テ必要ト視タリ

本條ニ於テハ第一ニ協諧ノ提案ヲ為スニ欠
クヘカラサル要件ヲ列擧ス即チ左ノ如シ
第一破産者ノ破産者トシテ法律上履行ス
ヘキ義務ヲ履行シタルヲ要ス苟モ此義務ヲ
履行セサル者ハ初メヨリ其正実良意ノ信ス
ヘキモノナシ故ニ協諧ノ寵遇ヲ許與スヘカ
ラス殊ニ其遵行スヘキモノハ第千三條及第
千四條ノ規則是レナリ今ヤ債務者ニシテ破
産届出ヲナサス又ハ正確實ノ對照表ヲ差
出サス又ハ失踪シ又ハ財産ヲ竊ニ轉匿セル
者ハ協諧ノ恩遇ヲ要求スルノ能ハサルヤ勿
論ナリ又第百九十條及ニ第百九十一條

エ茲ニ關係ス即チ該條ニ掲クル取引ヲ以テ
故ラニ債權者ニ害ヲ加ハント欲スル片是レ
ナリ他國ノ法律ニハ多クハ此要件ヲ狭クス
故ニ不完全ナリ(獨逸劇產法第百六十二條第
一項白國高法第五百十六條第五百二十條佛
國高法第五百十四條)佛國法律ニ於テハ汎ク
破產ノ性質協諧ノ許否ニ就テ論シ唯々裁判
官ノ之ヲ破毀スルトト許容スルトトニ係リ
敢テ初ヨリ法律上許否ノ事由ヲ定ムルトト
第二 債務者ノ有罪破產ノ為ノ處断セラレ
タルニ非ス或ハ其審査中ニ在ルニ非サルト

ヲ要ス他國ノ法律ニハ此點ニ就テ獨リ詐偽
破產ヲ擧ケ過怠ニ出ル破產ハ此ニ之ヲ問ス
トナシ(佛國高法第五百十條白國高法第四百
九十五條第五百四條獨逸劇產法第百六十二
條)蓋シ過怠及詐偽破產ハ外面上同一ノ行為
ヲ以テ起ル其差違タル唯々債權者ニ害ヲ加
ヘントノ意アルト否トニアリ此意ヤ證明シ
難キト往々ニシテ假令ニ債務者詐偽ヲ行フ
カ或ハ殆ント之ニ等シキ行為アルニ過怠破
產ノミノ罰ヲ受ルニ止マルヲ多トス又詐偽
ナキニ過怠破產ハ有罪有責ノ行為タルヲ免
レス而シテ債權者ニ損失ヲ蒙ラシメタル罪

アル者ニ尚ホ恩惠ノ協諧ヲ為スヲ得セシ
ムルハ権宜ノ許サ、ル所ナリ審問ハ未タ必
シモ被告人罪アルノ證ニ非ス故ニ放免セラ
レタル成ハ協諧申立ヲナスヲ得ヘシ然レ成
其審問中ハ之ヲ許スヘカラサルナリ(獨逸例
産法第百六十二條第二項)

第三 破産主任官ノ許可ハ協諧申立ノ旨趣
ニ関セス唯タ其法律上許スヘキヤ否ニ係ル
モノニシテ法律ニ適セス許容スヘカラサル
ノ顯然タル申立ハ初ヨリ受理スヘカラス(獨
逸例産法第百六十四條)於テハ此假審査ヲ
債権者總代ニ任ス是レ本案ノ主義ニ適セス

殊ニ是レ其法律上ノ審査ニ関スルヲ以テ破
産主任官ニ任スルヲ以テ至當トス故ニ破産
主任官ノ審査スヘキハ本條ノ規則踐行セラ
レタルヤ否債務者ノ協諧ニ差出サントスル
金額ニシテ財團ノ貸方ニ對シ少キニ過キサ
ルヤ否債務者果シテ協諧契約ヲ履行スルノ
カアルヲ證明シタルヤ否充分ノ抵保ヲ供
スルヤ否等ニ係ル(獨逸例産法第百六十一條)
破産主任官其協諧ヲ許スヘカラスト認ムル
成ハ債務者之ヲ申立ルヲ得ス然レ成後ニ至
リ其申立ヲ改正シテ差出スハ妨ケナシ
第四 協諧申立ノ時日ハ調査會ト第一債権

集會トノ間ニ在ルヲ例トシ其中立ハ此債權者集會ノ議ニ附スヘキ者ナリ其理由如何トナレハ貸方借方ヲ精知スルニアラサレハ協諸申立ノ當否ヲ正シク判断スルヲ能ハサレハナリ第一集會ハ調査會ノ後四週日後ニ之ヲ開クヘシ是レ一ハ異議ヲ受ケタル債權ヲ裁判スルニ充分ノ時日ヲ貸サレ為メ(第4ニ十八條)一ハ管財人及ニ債權者ヲシテ協諸申立ヲ了知審査スルヲ得セシメン為メナリ本條ノ末項ハ即チ之カ為メニ設クルナリ獨逸例產法第百六十五條第百六十六條佛國商法第百四條ニ於テハ其期限稍短縮ス

第五 何レノ破産ニ在テモ協諸申立ハ一度ニ限ル(獨逸例產法第百六十三條)其中立ハ眞實精確ニ思慮ヲ加ヘ債務者ノ總テ提供シ得ル所ニシテ實ニ義務アルモノヲ正實ニ提供スヘシ今夫レ數回續々協諸ヲ申立ツルヲ得ルニ於テハ初メ提供セシトスル所ヲ少ナクシ債權者ノ意向ヲトナフノ憂アリ此ノ如キ謀計ハ許スヘキニ非サルナリ然レ此第一集會ニ於テ雙方協議調ナフキハ申立ノ變更ヲ為スモ妨ケナシ唯々最初協議成ラサルニ及ンテ更ニ申立ヲ為スハ之ヲ許サス

第三十九條

協諧契約ヲ承諾スルニハ出席シタル債権者ノ過半数ノ承諾ヲ要ス其過半数ハ議決権アル總債権額ノ四分三以上ニ當ルヲ要ス
管財人及ヒ議決権ヲ有スル債権者又後ニ至リ債権ノ確定シタル債権者ハ協諧契約ニ對シ十日内ニ理由ヲ附シタル異議ヲ裁判所ニ申立ツルヲ得

協諧契約ヲ承諾スルニハ總債権者ノ同意ヲ要セス其過半数ニ及ブハ既ニ足レリ若シ總數ノ同意ヲ要スヘシトセハ百ノ協諧皆ナ成ルハカラサルヲ多トスヘシ否ヲ唱フル債

權者ニシテ多數ノ為メニ制セラル、ハ其私
權ヲ干犯スルノ嫌アルニ似タリト雖モ此干
犯ハ破産手續ノ性質然ラシムル所ニシテ不
法ニ非ス蓋シ個々債權者ハ破産ノ為メニ個
々債權ノ辨償ヲ受クルノ權ヲ失ヒ其債權變
シテ畫一ノ割合ヲ以テ財團ニ對スルノ債權
トナリ債權者ハ互ニ共同ニ共同ハ皆十多數
ニ重テ歸スルノ必要ヲ生ス是レ則チ此共同
ニ加ハラサル債權者協諧ヲ及ホサス其可決
ニ加ハルヲ許サ、ル所以ナリ共同ニ加ハラ
サル債權者トハ書入、質入、其他優先權ニ依リ
他ノ債權者ヲ除キ財團ノ一部ヲ以テ辨償ヲ

受クル者ヲシテ而シテ此ノ如キ者ヲ除クノ
外ハ皆十多數ノ議ニ從ハサル可ラス是レ別
ニ明言スルヲ須ヒス多數決ノ意義ヨリ自ラ
然リ改ニ佛國商法第五百十六條及ヒ獨逸
產法第百七十八條ノ規則ハ贅言タルヲ免レ
又第十二十九條ニ載スルカ如キ不參ノ債
權者或ハ未タ可否ノ權ナキ債權者ハ多數決
ニ服從スヘキト亦タ普通ノ原則ニ從ヒ自カ
ラ明ニシテ唯タ異議申立(第九十四條)ヲ以
テ自己ノ權利ヲ保護スルヲ得ルニ止マル然
レモ此多數決亦以テ獨立ノ効力ナク加フル
ニ裁判所ノ許可ヲ以テセサル可ラス

書入質主或ハ質主ニシテ尙ホ外ニ尋常ノ債
権ヲ有スル者ハ其債権ニ就テ可否ニ與カル
ヲ得ルハ言フ候タス然レモ其書入或ハ質入
上ノ債権ニ就テハ債権者一モ失ナフ所ナリ
何トナレハ別ニ充分ノ辨償ヲ受クレハナリ
之ヲ參席セシメサルハ一モ失ナフ所ナキカ
為メニ如何ナル協諧モ之ヲ贊成シ尋常ノ債
権者ニ害ヲ及ホスカ故ナリ故ニ其優先權ヲ
放棄シタル成ニアラサレハ議決ニ與カル
ヲ得ス(佛國商法第五百八條白國商法第五百
十三條獨逸刷產法第六十條)
然レモ書入物或ハ質物ノ其價額ヲ失ヒ或ハ

他ノ債権者其先ニ在ルカ為メ等ニテ其優先
權一モ効用ナク或ハ其効用一部分ニ止マル
トナシトセス此ノ如キ債権者ハ其債権ノ不
足額ニ就キ財團ヨリ辨償ヲ求メサルヲ得ス
今ヤ此額ニ就テ尋常ノ債権者ト為レ可否決
ニ與ラレムルハ權宜ノ然ラシムル所タルニ
似タリ然レモ可否決ニ加ハルニハ其與カル
額ヲ以テ限トシ優先取權ヲ棄捐セサル可ラ
サルナリ(日本第五冊第三百七十七條)
獨逸刷產法第八十八條)
多數ハ他國ノ法律ト同シク二様ニ算ス即チ
一ハ債権者ノ數ニ隨ヒ一ハ其債権額ニ準ス

佛國商法第五百七條白國商法第五百十二條
獨逸刑產法第百六十九條英國千八百六十九
年ノ法律第十六條第八項其理由ハ第三十
六條ニ於テ既ニ說明シタリ本條ノ場合ニ於
テハ總債權額ノ四分三ヲ要スト為ス是レ少
數債權者ニ抑制セラル、一ヲ可及的減セシ
カ為ノナリ各國法律ニ於テハ第一集議ニ在
テ右ノ法律上ノ多數ヲ得カレハ第二集會ニ
於テ再度ノ會議ヲ許ス又、アリト雖モ(佛國
商法第五百九條白國商法第五百十五條獨逸
刑產法第百六十九條)是レ徒ニ債務者ヲ寵遇
スルモ、ニシテ充分ノ理由アルニ非ス且不

主ノ謀計或ハ賄賂ヲ誘起スル媒介トナルハ
ニ故、本案ニハ之ヲ採用セズ

△此條ヲ移入ス

第四百四十條

債權者ノ承諾シタル協諧契約ハ裁判所ノ認可ヲ得テ始メテ法律上有効トス其認可又ハ棄却ニ付テノ決定ハ破産主任官ノ演述ヲ聽キ前條ノ期間滿了後直チニ之ヲ為ス此決定ニ對シテハ債務者及ヒ異議申立ノ權利アル者ヨリ即時抗告ヲ為ス可ク得

議決ヲ以テ承諾セラレタル協諧契約ハ裁判所ノ認可ヲ得テ初メテ法律上ノ効力アルヲ善ク是認セラレタル所ナリ(佛國高法第五百十三條第五百十四條白國高法第五百十七條第五百十八條獨逸劇產法第七十條以下其

決定ニ債務者管財人其他ノ者ヲ訊問スルト
否トハ裁判所ノ自由ナリ唯タ破産主任官ノ
法廷ニ於テ供述ヲ為スルハケクヘカラス其
決定ヲ為スハ官權ヲ以テシ法式的ノ申立ヲ
為シ其許否ヲ仰クハ必要ニ非ス佛國高法第
五百十三條及ニ獨逸倒産法第百七十三條ノ
之ニ反スル規則ハ贊成スヘキヌノニアラス
何トナレハ債權者集會ノ決議ハ抑モ裁判所
ノ認可ヲ要スレハナリ以テ可否ノ權ヲ有ス
ル債權者及ニ後日此權利ヲ得タル債權者ハ
皆協諧契約ニ對シ異議ヲ申立テ其棄却ヲ請
求スルヲ得ヘシ(佛國高法第五百十二條白國

前條ノ末
尾ニ入ル

高法第五百十六條獨逸倒産法第百七十三條
其管財人ニ此權ヲ與ヘタルハ財團ノ模様及
ニ破産者ノ動止ヲ判スルト該人ヲ以テ最ト
ニ裁判所ヲシテ其之ヲ採用スヘキヤ將タ棄
却スヘキヤニ就テ最モ確實ナル辨解ヲ得セ
シムレハナリ然レモ不埒ノ異議申立テ防カ
ニ為メニ其異議ニ付スルニ理由ヲ以テスル
トテ定メタリ今ヤ理由ヲ付セサル異議ハ時
ヲ後レタルノ可否ニ過キスシテ此場合ニ至
リテ許スヘカラサルモナリ

第千四十一條

協諧契約ハ左ノ場合ニ於テハ之ヲ棄却ス可シ

第一 第千三十八條及第千三十九條ノ規定ヲ踐行セサルニ

第二 協諧契約ニ依リ或ル債権者カ其承諾ナクシテ偏頗ノ處置ヲ受ケ損害ヲ被フル

第三 協諧契約カ詐欺其他不正ノ方法ヲ以テ成リタルニ

第四 協諧契約カ公益ニ觸ルニ

裁判所ノ協諧ヲ棄却スヘキノ理由(之ヲ修正スルノ權ハ裁判所之ヲ有セス)ハ本案ニ於テ

〔其他國ノ法律ト同シク之ヲ列擧ス唯々其異
ナル所ハ明瞭精悉ヲ加ヘタルニ在リ〕佛國商
法第五百十五條白國商法第五百十七條獨逸
劇產法第百六十八條第百七十二條第百七十
三條夫レ法式上ノ規則ヲ犯スハ許スヘカラ
ス何トナレハ是レ勿卒不正ノ所作ヲ防クヘ
キモノナレハナリ同意セサル債權者等ニ對
スル偏頗ノ處置ハ少數者ヲシテ全ク保護ヲ
失ナハシムルニ至ラシキ詐偽ノ存スルハ故ラ
ニ貸方隱蔽シ或ハ借方ヲ偽記シ或ハ貸方ノ
價格ヲ故ラニ貴ク記シ或ハ無実ノ融通方法
等ヲ揭ケ或ハ賄囑等ニ因リ個々債權者ノ同

意ヲ得タル片等ニ在リ公益ニ觸ルハ債務
者ヲ利スルニ過キ或ハ債務者疎虞又ハ過度
ノ投機ヲ以テ破産ニ至リタル片或ハ自己ノ
不足額ニ充分ノ説明ヲ與フルヲ能ハサル片
商人タルノ名譽ヲ汚穢シタル片或ハ其和解
唯々外觀ヲ主トスル片或ハ確實ニ和解ヲ踐
行シ得ヘキヤニ疑ヒアル片等ニ在リ裁判所
ハ此點ニ就テ獨裁權ヲ有スルモノニシテ獨
逸劇產法第百七十三條ニ此ノ如キ理由ニ出
ル棄却ヲ債權者ノ申立アル片ニ限ルハ其當
ヲ得ス蓋シ此點ニ就テモ輿論ヲ斟酌シ法律
並ニ道義ノ保護ニ注意ヲ用ヒタルヘカラス

改 = 佛國商法第五百十五條 = 於テモ公共ノ
利益ヲ酌量スヘシト明言ス(ザルウエイ)第六
百七十二葉以下)
裁判所ノ棄却 = 對スル抗告ハ他ノ諸國法律
= 於テモ之ヲ許ス(獨逸例產法第百七十四條
佛國商法第百十九條「アラワー」第五冊第
四百十八葉)

第千四十二條

協諧契約ハ破産者カ後 = 至リ有罪破産ノ判決
ヲ受ケタルモ其ハ當然消滅シ其審問中ハ既訴又
ハ無罪ノ宣告ヲ受クルマテ之ヲ停止ス
前條第三號 = 掲ケタル理由アルモ其ハ協諧契約
認可ノ後ト雖モ尚ホ之 = 對シテ異議ヲ申立ツ
ルヲ得

是レ佛國商法第百二十條以下白國商法第
五百二十一條第百二十二條獨逸例產法第
百八十二條第百八十三條 = 掲ケタル獨逸例產法
= 於テハ詐偽ノ為メニスル協諧ノ異議ハ債
務ノ免除 = 對スルモ = 限リ又獨リ其異議

ヲ申立タル債権者ニ効アルモノトス是レ不正ノ破産者ヲ利スルヲ甚シキモノニレテ決シテ賛成スハキニアラサルナリ(可ルウエ)

第六百九十葉

第一千四十三條

協諧契約ノ確定シタルハ管財人ハ直ニ其執務ヲ罷シ且其執務ニ付キ計算ヲ為ス可シ破産者ハ協諧契約ニ別段ノ定ナキハ限り任意ノ管理及ニ處分ノ為シ其財産ヲ取戻スナラ

得 協諧契約ノ履行ハ破産主任官ノ監督ヲ以テ之

ヲ為ス 終結ニ至ラシムル効驗アリトハ往々世人ノ稱スル所ニテ獨逸倒産法第百七十五條

於テハ(該法ニ於ケル以下ノ諸條ト抵觸スルモノ拘ラス)明ニ之ヲ揭ケタリト雖モ敢テ然

ルモノニアラズ破産手續ハ唯々要點ニ於テ
其形狀ヲ變シ協諸契約ノ許ス所ヲ限トシテ
債務者其財産ノ管理及處分ノ權ヲ回復スル
ノミ今ヤ委棄協諸ノ如ク債務者財産ノ全部
又ハ一部ヲ債權者ノ管理ニ附シ悉皆之ヲ其
辦償ニ充ツルトナシトセザルナリ佛國高法
第五百十九條第五百四十一條千八百五十六
年七月十七日ノ同國法律獨逸例產法第百七
十七條白國高法第百十九條佛國及ニ白國
ノ高法・於テ協諸ノ効驗ヲ説ク其當ヲ得タ
リ曰ク管財人ノ職掌止ニ債務者其財産ヲ受
取リ自由ニ管理スル又債務者ハ唯々其身ノ

自由ヲ得テ新ニ契約ヲ結ビ其所得ノ割合ヲ
以テ債權者ニ辦償スルニ止マルカ如キ無シ
トセズ之ヲ要スルニ協諸契約及ニ其実行ハ
債務者ヲシテ復權セシムルニ非ス又破産手
續ノ全体之カ為メ止ムニアラズ債權者ヲ
シテ其同辦償ヲ受ケシムルノ一事ハ仍ホ存
シ破産者ハ裁判所ノ判決ヲ以テ認可ヲ經タ
ル協諸契約ニ基キ裁判執行ノ狀態中ニ在リ
此協諸契約ニハ確定裁判ノ性質ト裁判執行
的ノ債務名稱ノ性質トヲ存スルモナリ獨
逸例產法第百七十九條又協諸ハ債權者集會
ニ參セス或ハ參スル能ハサリシ債權者ニ對

シテモ仍ホ其効驗ヲ存シ其一債権者ニ對シ
テ其義務ヲ履行セサルハ輒々協諧廢止ノ
結果ヲ生(獨逸)獨逸刑產法第百八十一條ニ於テハ
固ヨリ之ヲ是認セズ是レ迷誤ニ出ヅスルノ
一點ヨリ論ハテモ破産手續ノ仍ホ連續スル
ハ知ルヘキナリ今ヤ此ノ如ク協諧ノ後ト雖
モ債務者ハ猶ホ裁判執行ノ狀態中ニ在ルヲ
以テ破産主任官ヲシテ契約履行ノ監督ヲ
ヲ為サシムルハ最モ便宜ニ適セリトス(即
債務者ハ支拂フヘキ金額ヲ破産主任官ニ支
拂ニ該官ヨリ更ニ債権者ニ交付スヘシ是レ
協諧契約ノ履行ヲ監督スルノ最良方便ニシ

債務者^セ之ヲ為サス或ハ遲延スルハ破産
主任官直ニ其履行ヲ督促シ或ハ差押ヲ施ス
ヲ得ヘシ又債務者協諧契約ニ背キ或ハ其履
行ノ妨害トナルヘキ行為アルハ該官之ヲ
禁止スルヲ得ヘシ

佛國商法第百十七條及ヒ白國商法第百
十八條ニ於テハ協諧契約上ノ債権者ヲシテ
破産上ノ債権者ト同シク破産者ノ財産ニ對
シ書入質權ヲ有セシム此ノ如キ佛國法律ノ
特異ナル所ハ採用スルノ必用ナシ(獨逸)獨逸
法第百八十七條⁷ガルウエ¹第六百八十七條^葉

第千四十四條

協諧契約カ棄却セラレ又ハ後ニ至リ消滅シ若クハ取消サル、其又ハ不履行ノ為メ解除セラ
ル、其ハ破産手續ヲ再施シ直ニ財團ノ換價
及ニ配當ヲ為シテ終局ニ至ラシム其再施シ
ル手續ニハ再施マテノ間ニ債權ヲ得タル者ニ
参加スルヲ得
不履行ノ場合ニ在テハ協諧契約ノ為メ立テ
ル保證人ハ其義務ヲ免カレス
協諧契約ニシテ認可セラレス或ハ後日其効
力ヲ失ヒ或ハ債務者之ヲ履行セサル其ハ是
レ新ニ支拂停止ヲ生シタルモノニシテ債務

者ハ全ク破産ノ状態ニ復ス故ニ其間ニ協諧
ノ生セザリシト同一ノ作用ヲ生シ裁判所ニ
於テ其財團ヲ管理スルノ始マル然レ凡今
回ハ第千十七條ニ掲クル酌量ヲ用ヒス專ラ
債権者ノ為メニ再ニ必要ト認ムル内ハ新
ニ貸方借方對照表及ヒ財産目錄ヲ製シ又新
債権者ヲ督促シテ其債権ヲ届出及證明セシ
ム之カ為メニ新ニ調査會ヲ立ツ是レ佛國
高法第五百二十二條乃至第五百二十四條ニ
明言スル所ナリト雖モ再ニ破産手續ヲ施ス
トノ一語アレハ自カラ明瞭ナリ(獨逸例産法
第百八十六條及ヒ第百八十七條白國高法第

五百二十四條)而シテ協諧廢止ノ申渡アルヤ
債務者ハ一旦其得タル財産處分權ヲ失ヒ再
ニ第百八十五條(其結果トス)ヲ適用ス其債
務者財産ヲ自由ニ處分スルノ間ニ引渡ケタ
ル義務ハ舊債権者之ヲ是認セサルテヲ得ス
但タ詐偽又ハ支拂停止ニ係ル一般ノ理由ヨ
リシテ異議ヲ唱ヘ得ヘキモノハ此限ニアラ
ス白國高法第五百二十三條ハ高ホ此點ニ就
テ其範圍ヲ廣クス(佛國高法第五百二十五條
同民法第千百六十七條獨逸例産法第百八十
五條)
保證人ニ關スル規則ヲ設ケタルハ保證人ノ

保証スル所ハ本債務者ノ其義務ヲ履行セサ
ルキノ為メニスルモノナリ佛國高法
第五百二十條白國高法第五百二十三條ニ於
テモ同一ノ規則アリ然レモ協諧認可セラレ
ス或ハ後日消滅シ又ハ取消サレタル場合ニ
於テハ(第千九十五條第千九十六條)右ニ反シ
テ保証人モ其義務ヲ免カレサルヘカラス何
トナレハ本債務者ノ義務抑モ存セサレハ十
リ(佛國高法第五百二十條白國高法第五百二
十二條)

新財團ハ新舊總債權者ノ辨償ニ充ツヘキハ
勿論ナレモ新債權者ハ協諧ヲ以テ舊債權者

與ハタル優先權又ハ抵當權ニ與カルヲ
得ス舊債權者ハ最初ノ配當ニ在テ辨償ヲ受
ケサルモノヲ限トシ財團ノ配當ニ加ハルヲ
得ヘキハ勿論ナリ(獨逸例產法第百八十六
條佛國高法第五百二十六條)

債務者獨リ契約ヲ履行セサルニ止マラス抑
モ其支拂ヲ停止シタルモ同シク本條ヲ適
用スヘシ故ニ此場合ニ在テモ尋常ノ原則ニ
從ヒ再ヒ破産手續ヲ開始完行スヘシ必レモ
更ニ破産宣告ヲ下スヲ須ヒス何トナレハ其
契約ノ存スル間ハ債務者破産ノ狀態中ニ在
レハナリ(佛國高法第五百二十六條末段白國

高法第五百二十七條

佛國高法第五百二十九條乃至第五百四十一條ニハ債權者連合ト稱スル一章ヲ設ケ此連合ニ協諧契約ノ成ラサルキニ自カラ起ルモノナリ然レハ債權者ノ連合ハ破産ノ始ノヨリ存レ協諧契約中ニ於テ之綿續スルモノニシテ右ノ規則ヲ立ツヘキ論理上ノ原因ヲ見ル能ハサルナリ加之該章ハ主トシテ管財人ノ財團ヲ賣却スルトニ係ルモノニシテ本案ハ既ニ第五章ニ之ヲ載セタリ

第八章 配當

第四十五條

第四十三條ニ掲ケタル債權及ヒ優先權アル債權ヲ支拂ヒタル後ニ殘レル財團ハ他ノ債權者間ニ平等ノ割合ヲ以テ之ヲ配當ス
破産者カ資本ヲ分ケ數箇ノ營業ヲ為シタル場合ニ在テハ各營業ニ對スル債權者ハ其營業ニ屬スル財團ヨリ優先權ヲ以テ辨償ヲ受ク
法律ニ從ヒ確定シタル協諧契約ニ依リ債務者自カラ其支拂フヘキモノヲ支拂フ成ニ非非ヤレハ管財人財團ノ配當ニ着手ス配當ハ債權者ヲシテ裁判上財團ノ管理ニ於テ其得

ヘキ程度ヲ以テ支拂ヲ受ケシムルモ、シ
テ現存ノ財團中ヨリ第一ニ總債権者共同ノ
主義ニ依ルヘカラサル債権即チ破産債権ノ
性質ヲ有セスシテ破産手續中其手續ノ為メ
ニ生シタル債権ヲ辨償スヘキハ説明ヲ要セ
ス又書入質主質主其他ノ優先権アル債権者
ニシテ別除権ノ執行ヲ以テ辨償ヲ受ケス或
ハ其優先権ヲ全ク放棄シタル者ハ各其相當
ノ順序ニ隨ヒ特別ノ抵當物ノ價額ヨリ前以
テ支拂ヲ受ケヘキト言フ俟タズ今ヤ右ノ支
拂ヲ為シタル後殘ル所ノ財團ハ各債権額ノ
比例ヲ以テ同等ノ權利アル債権者ニ配當ス

故ニ各債権者ハ其債権額ノ部割ヲ以テ平等
ノ支拂ヲ受ケルモ、**佛國商法第五百六
十五條**白國商法第五百六十一條獨逸例產法
第二條債務者數箇ノ營業ニ從事シ各獨立ノ
資本ヲ以テ之ニ充テ其計算ヲ別ニシタル成
ハ債権者亦タ數方ニ別レ甲營業ノ債権者ハ
必スシモ乙營業ノ債権者ニ非ス此場合ニ於
テ債務者破産シタルハ甲乙債権者各其營
業ノ財團ヨリ辨償ヲ受ケ然レ氏破産者ハ全
財產ヲ以テ辨償スルノ義務アルカ故ニ甲營
業ノ財團ニシテ辨償ヲ完成スル能ハサル成
ハ乙營業ノ財團ヲ以テ其不足ヲ補ハサル可

アラス然ルニ此ニ營業ノ財團亦タ債権者ヲ
有スルカ故ニ之ニ辨償シテ猶餘分アルニ非
サレハ甲財團ノ債権者ニ償フテ得ス是レ
本案ニ甲乙債権者各其營業ノ財團ヨリ優先
権ヲ以テ辨償ヲ受クト為ス所以ナリ

第四十六條

配當ハ普通ノ調査會ノ終リタル後ハ配當ニ足
ル可キ財團ノ生スル毎ニ管財人ノ調製シテ破
産主任官ノ認可ヲ受ケタル配當案ニ依リテ之
ヲ為ス其案ハ破産主任官之署名レ公衆ノ展
閱ニ供スル為メ裁判所ニ備置キ且其旨ヲ公告
ス可シ

配當案ニ對スル異議ハ其公告ノ日ヨリ起算シ
十四日内ニ之ヲ裁判所ニ申立ツルヲ得
配當ハ必スシモ一回ニスルヲ須ヒス相當ニ
配當スヘキ財團集マル毎ニ數度ノ割拂ヲ以
テ續々支拂フテ得ヘシ但タ破産主任官ハ

個々ノ配當ヲ豫メ許否スヘキモ、コレヲ甚
タ少額ナル配當ハ之ヲ許スヘカラス、何トナ
レハ甚タ少額ノ金員ハ毫モ債権者ヲ利スル
トナケレハナリ、而シテ其配當ヲ受クルハ成
規ノ確定(第三十六條)ニ依リ債権ヲ執行スル
トヲ得ルニ至リタル者ニ限ル故ニ未タ其確
定ヲ經サル債権者ハ配當ニ加ハルニ其確定
ヲ待タサルヲ得ス、然レ此自乙ノ罪ニ出ルニ
アラス、コレヲ確定遷延ニ及ビタル債権者ノ為
メニハ例外ヲ立テ既ニ之ヲ第四二十九條ニ
掲ク(佛國商法第五百三條、第五百六十七條、第
五百六十八條、獨逸例產法第四百十三條、第百

五十五條)故ニ此ノ如キ債権者ハ其債権確定
ヲ經テ実行スヘキモノトナルニ及ビテハ其
債権ニ相當スル以前ノ配當額ヲ前取スルト
ヲ得ヘシ、是レ則チ普通ノ調査會終リタル後
ニアラサレハ配當ニ着手スヘカラストスル
所以ナリ、何トナレハ此時ニ至リ始メテ各債
権ノ確定ヲ經ヘキヲ以テナリ、然レ此相應ニ
分配スヘキ現金ヲ存セサルニ或ハ債務者ヨ
リ採用スヘキ協諾契約ノ提供ヲ為スノ期望
アルニ破産主任官ノ思料ヲ以テ尚ホ配當
ヲ延期スルトヲ得ヘシ、故ニ配當ハ第一集會
ノ後ニ始ムルヲ常トス(獨逸例產法第四百十

八條

管財人ハ一已ノ見ヲ以テ財團ヲ支出スル
トテ得サルカ故ニ破産主任官ノ許可ハ何レ
ノ配當ニモ必要ナリ而シテ破産主任官ハ唯
タ其配當大體ノ許可ヲ與フルニ止マラス其
細目即チ毎回ノ部割及ヒ債権者ノ配當名簿
ニモ許可ヲ與ヘサルヘカラス蓋シ配當ハ初
メ為シタル確定ニ基キ之ヲ為スモノナレハ
自由ノ見ハ此間ニ挾ムヲ得スト雖モ管財
人ハ錯誤等ヲ以テ法律ニ背馳スルトナレト
セサルナリ而シテ個々債権者ハ調査會ニ於
ケルカ如ク配當案ニ對シ異議ヲ申立ツルト

ヲ得何トナレハ不正當ニ加入セシラレ或
ハ其割前高キニ過ルノ債権者アリ又ハ其權
アリテ加入セシラレサル債権者アルカ如
キトナキニ非サレハナリ(獨逸別産法第百三
十九條第百四十六條佛國高法第五百六十六
條白國高法第五百六十一條佛國白國ノ法律
ニ依レハ管財人ハ毎月現在高報告書ヲ破産
主任官ニ差出サシムルヘカラス然レモ是レ苟
察ニ過キ且第千二十條ノ規則ヲ守ルニ於テ
ハ實際ノ需要ナレバ若夫レ配當案ニ於テ
ハルナレヨシハ佛國高法第五百六十九條及
白國高法第五百六十三條ニ於テモ之ヲ明

第千四十七條

前條ニ掲ケタル期間ニ配當案ニ對シテ異議ヲ
 申立ツル者ナキハ又ハ其異議ノ落着シタルハ
 ハ管財人ハ各債権者ヲシテ其債務證書ヲ提出
 セシメ之ニ毎回ノ支拂額ヲ記入シテ支拂ヲ為
 ス若シ債務證書ヲ提出ヲ為スニ能ハサルハ
 破産主任官ノ許可ヲ得テ債権表ニ依リ支拂ヲ
 為スニ得孰レノ場合ニ於テモ債権者ハ配當
 案ニ受取證ヲ記スルニ要ス

是レ佛國商法第五百六十九條白國商法第五
 百六十三條ニ掲ケル所ニシテ此規則ハ可及
 的無根ノ支拂ヲ豫防シ且其支拂ヲ為シタル

明證ヲ保存セシムルヲ爲メニ設クルモノトス（「ア
」第五冊第六百三十八條）

第千四十八條

財團ノ換價及ニ配當ヲ全ク終リタルニハ債權
者集會ヲ開キ此集會ニ於テ管財人ハ終局ノ計
算ヲ爲ス可シ此計算ノ濟了シタルニハ裁判所
ハ直クニ破產主任官ノ申立ニ因リテ破產手續
ノ終結ヲ決定ス此決定ハ之ヲ公告ス可シ
此規則ハ佛國商法第五百三十七條白國商法
第五百三十三條獨逸倒産法第七十八條及ニ
第百四十九條乃至第百五十一條ニ掲ク管財
人ノ決算書ハ集會ニ於テ債權者ニ提示シ債
權者ハ之ヲ議シ且之ヲ異議スルヲ得ヘシ此
異議ニシテ平和ニ其局ヲ結フ能ハサルニハ

破産裁判所之ヲ判決ス然レハ異議ヲ申立ル
者ハ辨償ヲ受ケタル債権者ニ限ルヘシ何ト
ナレハ既ニ辨償ヲ受ケタル債権者ハ別ニ要
求ヲ起スヘキ法律上ノ利益ヲ有セサレハ十
リ^中ルウヘイ第四百六十二條第二注若夫レ
管理上ノ計算ニ係ル異議ヲ通常裁判ノ手續
ニ付スルハ其當ニ非ス是レ管財人ノ其職ヲ
執ル直接ニ破産主任官間接ニ破産裁判所ノ
監督ヲ以テシ且財團管理上ノ調査ハ破産手
續ノ一部分タルヲ疑フ容レサルノ一點ヨリ
論スルモ既ニ然リ而シテ決算ニ係ル異議ハ
集會ノ議決ニ依ルヘク其同意者過半数ニ及

フニアラサレハ之ヲ裁判所ニ申立ツルヲ
得サルナリ

第千四十九條

破産手續終結ノ後ハ辨償ヲ受ケサル債權者ハ
破産手續ニ於テ確定シタルニ因リテ得タル權
利名義ニ基キ其債權ヲ債務者ニ對シテ無限ニ
行フテ得

本條ノ規則ハ破産手續落着ニ因テ生スル自
然ノ結果ニシテ債權者ノ連合ハ既ニ其終ヲ
告ケ各債權者個々ニ要求ヲ為スノ權ヲ得(佛
國商法第五百三十九條白國商法第五百三十
五條千八百七十一年七月二十七日、同國法
律獨逸劇產法第百五十二條)今ヤ債權ノ確定
ハ裁判所ノ認可或ハ判決ニ依リテ成ルモ、

ナレハ債権者ハ更ニ負債者ニ對シ新訴訟ヲ
起スヲ須ヒス債務者ノ再ニ財産ヲ得ルニ於
テハ直ニ右ノ認可若クハ判決ニ基キ之ニ對
シテ裁判執行ヲ請フヲ得ヘキナリ獨逸例
産法ニ於テハ此ニ制限ヲ立テ債務者ノ調査
會ニ於テ明ニ異議ヲ唱ヘナリシ所ノ債権ニ
限リ然ルヲ得ルモノトス是レ債務者ノ調査
ニ於テ訊問セラル、ヤ唯々辨明ノ為メニス
ルニ止マリ敢テ被告ノ地位ヲ以テスルニ非
ストナクフニ出ツ然リト雖モ若シ此理由ヲ以
テスレハ明ニ異議ヲ唱ヘサルカ為メニ默諾
ノ是認ヲ為シタリトシタルトモ不可ナルニ

至ラン且破産ニ於ケル債権ノ調査ハ原被兩
告ノ對審ニ非ス干涉裁判主義ニ依リ總關係
者ノ間ニ届出ノ債権ヲ調査スルニ止コリ又
債務者ノ財産ニ關スル一切權利上ノ處置ニ
於テ管財人ノ代理シタルトハ破産手續終結
ノ後ニ取消スナラ得ス若シ取消スナラ得ル
ニ於テハ管財人ノ債務者ニ代リ起シタル訴
訟ニ係ル判決ノ効力ニ對シテモ異議スルノ
權ヲ債務者ニ與ヘサルヲ得サルニ至テハ右
兩點ニ着目スレハ獨逸法ノ制限其當ヲ得ナ
ルト自ラ明ナリ

佛國及ニ由國法律ニ於テハ債務者ヲ宥免ス

トキヤ否ヤヲ調査スルノ一ヲ掲ク此規則ハ
債務者ヲ勿留スルノ可否ニ関スルモノニシ
テ近來債務勾留(ト)コントレシト、バル、フー、ル
一般ニ廢シタルヲ故ニ無用トナレ

第九卷 有罪破産

第一千五十條

破産宣告ヲ受ケタル債務者カ支拂停止又ハ破
産宣告ノ前後ヲ問ハス履行スルノ意ナキ義務
又ハ履行スル能ハサルヲ知リタル義務ヲ負
擔シタルキ又ハ債權者ニ損害ヲ被ラシムル
ノ意思ヲ以テ貸方財産ノ全部若クハ一分ヲ藏
匿シ若クハ轉匿シ又ハ借方現額ヲ過度ニ掲ケ
又ハ高業帳簿ヲ毀滅シ藏匿シ若クハ偽造、變造
シタルキハ詐欺破産ノ刑ニ處ス

破産ニ係ル罰則ハ素々刑法ニ屬ス然レ共或
ハ刑法ヲ改メ或ハ之ヲ補ハン為メニ商法或

ハ破産法ニ之ヲ掲クルハ各國皆ナリ然リ即チ
佛國ニ於テハ刑法第四百二條第四百三條ニ
尋常破産詐偽破産ニ関スル一般ノ罰則アリ
ト雖モ此兩義ノ一ニ屬スル特別ノ罰則ヲ高
法ニ載ス(第五百八十四條乃至第六百條)十八
百七十年ノ獨逸刑法第二百八十一條乃至第
二百八十三條ニハ有罪破産ノ諸場合ヲ收擧
不然レモ後日之ヲ不充分ナリト認メ更ニ破
産法第二百九條乃至第二百十四條ノ罰則ヲ
以テ之ニ代ヘタリ日本刑法ニ於テモ第三百
八十八條及ニ第三百八十九條ニ(破産)破産ニ関ス
ル罰則ヲ載セタリト雖モ渾ク之ヲ考察スレ

ハ欠漏アルヲ免レス殊ニ破産上ノ罰則ハ破
産法ノ如何ニ依ルハキモノニシテ破産上
有罪ノ事由ハ之ヲ破産法中ニ索メタルヲ得
ス故ニ本章ハ包括精密ニ其罪ノ事由ヲ掲ク
然レモ其罰ノ寬嚴ハ刑法上他ノ權衡ヲ酌量
シテ定ムル所ナルニ任スルヲ可トス
破産ノ罪ヲ至當ニ判セシメハ破産ナル
モノ抑モ債權者ニ財産ノ損失ヲ蒙ラシムル
ヲ常トシ概シテ竊盜其他總テ財産ニ對スル
罪ト同一視スヘキヲ考察セサルヘカラス
昔日ニ在テハ破産ヲ論スル頗ル嚴ニシテ之
ヲ罰スル極メテ酷ナリ例ハ佛國ニ於テハ

千六百七十三年ノ布告ニ於テモ詐偽ノ破産
ヲ罰スルニ死刑ヲ以テセリ近時ニ於テハ此
點ニ就テ稍々寛恕ノ主義ヲ執リ自己ノ過失
ナクシテ破産ニ陥ル者アルトアリ以テ実
際刑法ニ觸ルノ罪ヲ犯シタルニ非レハ刑
法上普通ノ原則ニ從ヒ之ヲ論スヘカラサル
トテ發見シタリ是ヲ以テ破産者意アリテ行
ナフタルヤ將タ輕率ヲ以テ為シタルヤ區
別シ之ニ依リテ其罪ノ輕重ヲ論ス本案亦此
區別ニ依リテ破産ノ刑ハ裁判所ヨリ破産宣告
ヲ受タル者ニ對シ刑事裁判所之ヲ加フ故ニ
支拂停止ノ事實アルニ未タ足レリトセス又

破産宣告ハ刑事裁判所之ヲ下ストテ得ナル
ヲ以テ事理ノ當ヲ得タルニトス何トナレハ
破産ノ状態ハ獨リ事實上ヨリ生スルヲ得ス
必スヤ裁判官ノ宣告ニ出テサルヘカラス又
破産宣告ハ民事上ノ効驗ヲ有スルモノナレ
ハ民事裁判所ニ屬スヘキト當然ナレハナリ
然レハ民事上ト刑事上トノ二重ノ破産宣告
アルヲ得ス破産ノ状態ハ民事上ノ状態ニシ
テ夫婦間或ハ丁年等ニ傳ルモノ、如ク刑事
處分ノ為ニモ民事裁判官ヨリ申渡スヘキ
モノナリ其支拂停止ノ一事ヲ以テ充分トセ
サルハ破産宣告ヲ受クルニ非レハ法律上ニ

支拂停止存スルヲナケレハナリ
第六冊第二十五葉獨逸創産法ニ依レハ支拂
停止ノ一事アレハ判事裁判所ノ判決ヲ下ス
ニ充分トス然レモ未タ破産ノ宣告ヲ受ケサ
ルニ先タケ破産ノ罪ヲ以テ入テ罰スルノ理
由ハ見ル能ハサルナリ
罰則ハ獨リ常職ノ商人ニ適用スルニ止コラ
ス總テ第九百七十八條ニ從ニ破産宣告ヲ受
クル者即ケ商業取引ニ於テ支拂停止ヲナレ
タル者ニ適用ス
詐偽破産ノ罪ト稱スルニハ法式上ノ破産宣
告ノ外債務者ノ其債權者ヲ欺クノ意即ケ債

權者ニ財産上ノ損失ヲ加ヘントスルノ意(債
主)創産品ニ就テ得ヘキモノヲ奪フアルヲ
要ス此點ヨリ論スレハ詐偽破産ハ竊盜或ハ
詐欺取財ト同一タリ是レ獨逸創産法ニ於テ
明言スル所ニシテ佛國法律ニ於テモ詐偽破
産ノ語ハ同シク此意ヲ表スルモノナリ
何レノ時ニ該所為ノアリタルヤハ問フ所ニ
非ス支拂停止或ハ破産宣告ノ前ニアルモ其
後ニアルモ皆同シ(ナルウエ)第七百三十八
葉
各國ノ法律ニ於テモ詐偽破産ノ犯罪トナル
所ノ行為ヲ大要掲出シタリ佛國商法第五百

九十一條獨逸創產法第二百九條白國商法第
五百七十七條佛國商法。於テハ商業帳簿ニ
就テ唯々其藏匿（スーストレール）ノ一ヲ掲ク
然レモ其毀滅或ハ偽造變造及貸方借方ノ額
ヲ隱蔽シタルモ齊シク債權者ヲレテ其債權
ノ実行ヲ困難ナラシムルニ足ル獨逸創產法
ニ於テハ右ノ外商業帳簿ノ登記ヲ全ク為サ
、リシテ此ニ算入ス然レモ是レ破産ト関
係ヲ隔ル一甚タレテ詐偽破産ノ場合ト同一
ニスルハ其當ヲ得サルカ如シ
本條ニ於テハ近來ノ實驗ニ徴シテ古來ノ法
律ニ掲ケサル一二ノ場合ヲ加ヘタリ今ヤ投

機的ノ預リ金ヲ為シ非常ノ高利ヲ約束シテ
公衆ヲ誘ヒ其金錢ヲ奪フ一ヲ目的トシテ銀
行ヲ立テ或ハ高價ニテ高品ヲ掛買シ之ヲ現
金ニテ賤價ニ賣却スル等ノ事アルハ稀ナリ
トセス此ノ如キ取引ハ永續シ得ヘキニアラ
ス要時ニシテ破産ニ陷ラサルヲ得ス苟クモ
此ノ如キ取引ヲ為ス者ハ故テニ破産ヲ招ク
モノニシテ其個々ノ取引ニ於テ或ハ右ノ故
意ナキ一アルモ為ノニ宥恕スヘキニアラス
殊ニ個々ノ債權者ニハ姑ク辨償ヲ怠ラサル
一ナキニ非ス然レモ皆他ノ債權者ノ物ヲ以
テス故ニ此等ノ取引ハ箇々ニ就テ有罪ナル

ニ非ス破産ヲナレタルニ其全体ニ就テ有添タ
リ此等其關スル所ハ個々債権者ノ損害ニア
ラズ債権者全体ノ損害ニアリ何トナレハ其
取引タル全体ニ於テ債権者ノ辨償ニ供スヘ
キ財團ヲ減スレハナリ

第451條

破産宣告ヲ受ケタル債務者カ支拂停止又ハ破
産宣告ノ前後ヲ問ハズ左ニ掲クル行為ヲ為シ
タルハ過怠破産ノ利ニ處ス

第一 一身又ハ一家ノ過分ナル費用博變空
取引又ハ不相應ノ射利ニ因リテ貸方財産
ヲ甚シク減少シ若クハ過分ノ債務ヲ負ヒ
タルハ

第二 支拂停止ヲ延ハサンカ為メ損失ヲ生
スル取引ヲ為シテ支拂資料ヲ調ヘタルハ
第三 支拂停止ヲ為シタル後支拂又ハ擔保
ヲ為シテ或ル債権者ニ利ヲ與ヘ財團ニ損

害ヲ加ハタル也

第四 商業帳簿ヲ秩序ナク記載シ藏匿シ毀

滅シ又ハ全ク記載セサル也

第五 破産者カ第三十二條第九百七十九條

又ハ第四十三條第二項ニ規定シタル義務ヲ

履行セサル也

過怠破産ノ詐偽破産ト異ナルハ債務者故ラ

ニ破産ヲ起因シタルニ非ス又其破産ノ成

ハ破産ノ成ノ為ニ故ラニ債権者ニ損害ヲ

加ハタルニ非ルニ在リ故ニ過怠破産ハ疎慮

輕忽奢侈、怠惰等ニ因テ生ス是レ亦タ有罪ニ

シテ他人ニ損失ヲ加ハタルノ責ニ當タラサ

ルヲ得ス然レモ敢テ惡意ナキカ故ニ過怠ノ

種類ニ屬スルノニ是ヲ以テ過怠破産ハ輕罪

ノ刑ヲ以テ論スヘキ也ノナリ

各國法律ニ掲クル所ノ過怠破産ノ項目ハ殆

シト同一ニ出ツ(佛國商法第五百八十五條第

五百八十六條白國商法第五百七十三條第

百七十四條獨逸倒産法第二百十條第

一條

本案ハ佛國法律ノ細密ナル列記ニ倣フタリ

ト雖モ其罰セサルヘカラサル場合ト罰スル

ヲ得ル場合トヲ區別シタルハ刑事ニ適當セ

ス故ニ之ヲ採ラス以テ後者ノ種類ニ屬スル

項目ハ之ヲ載セズ(佛國商法第五百八十六條
第一、二、三項)何トナレハ是レ抑モ疑義ヲ免ル
ハカラサル性質アレハナリ若夫レ細目ニ至
テハ下説明ス

第一項 不相應ノ射利トハ債務者ノ財産ト
權衡ヲ失ヒ其生ズル損失ヲ債務者
償フ能ハサルヘキモノヲ云フ

第二項 損失ヲ生ズル取引トハ一時收入ア
ルモ他日財産ヲ減殺スルモノヲ云
フ例ハハ相場外ノ賤價ニテ商品ヲ
賣却シ高利ノ負債ヲ起シ多額ノ為
替資金ヲ以テ為替取引ヲ為ス等是

レナリ此場合ノ前條第一段落ト異
ナル所ハ債權者ニ不利ヲ蒙ラシム
ルノ惡意アルニテラス唯タ支拂停
止ヲ遷延シ他日ノ幸運ヲ待テ之ヲ
免レントノ期望ニ出ルニ在リ
第四項 此場合亦タ債務者ノ怠惰輕率等ニ
出ルモノニ限り不正ノ意アルモノ
ハ此ニ算セズ

第五十二條

前二條ノ罰則ハ商事會社ノ業務擔當ノ任アル社員若クハ取締役及ク清算人ニモ之ヲ適用シ又第五十條ノ罰則ハ破産管財人及ク有罪行為ヲ行フノ際犯者ヲ助ケ又ハ有罪行為ヲ破産者ノ利益ノ為メニ行ヒタル者ニモ之ヲ適用ス

商事會社ニ於テ業務擔當ノ任アル社員等(第

九百七十九條)ハ商業主人ノ地位ニ代ルカ故

ニ若シ其經理スル會社ノ破産ヲ誘起シタル

成ハ主人ニ等シク法律ヲ以テ罰スヘキ行為

ノ責ニ任セサルヲ得(獨逸刷産法第二百十四

條白國商法第五百七十六條)

他人ニシテ債務者ヲ助ケ或ハ之カ為メニ自
カラ有罪ノ所業ヲ為シタル者ハ殊ニ債務者
ノ家族及商業使用人及ニ代務人其他虚構ノ
要求ヲ届出テ或ハ届出テシメ債務者ノ偽描
借方ヲ是認シタル債權者タルヘシ(佛國商法
第五百九十三條)第五百九十四條獨逸刷産法
第一百十二條(破産者ノ犯罪ニ與ニシタル者
ハ獨逸及佛國ニ於テ普通ノ原則ヲ以テ罰ス
テラワール第六冊第七十七葉第二註然レ此
過急ノ幫助ハ不可成的モノニシテ幫助ノ罪
ハ獨り第千五十條ノ罰アルノミ又破産者ヲ
正犯トシ單ニ幫助シタルト破産者或ハ其情

ヲ知ラス或ハ其有罪ノ行為アルニ非ナルニ
之レカ為メニ該條ノ罪ヲ犯シタルトハ混同
スヘカラス(テラワール第六冊第九十五葉第
九十八葉)「サールウエイ」第七百四十三葉
若夫物品ヲ財團ヨリ奪去スル者破産者ノ為
メニスルニ非ナレハ是レ純然タル竊盜タル
ヘシ佛國法律第五百九十四條ニ於テハ破産
者ノ婦或ハ近親ノ犯シタル此ノ如キ罪ニ竊
盜ヲ以テ論ス然レ其為ニ充分ノ理由アルニ非
サルナリ
佛國ニ於テハ管財人ヲ論スルニ不正実(マル
ウヘルサレヨシ)ノ行為(高法第五百九十六條)

ヲ以テスル下アリ(白國高法第五百七十五條
第四項)然リト雖モ管財人ハ過怠破産ノ罪ヲ
犯スノ理ナク其罪ヤ大抵財團ヲ滅殺シ或ハ
偽債権者ヲ是認スル等ノ下ニ係ル故ニ漢然
タル不正実ノ語ヲ用ヒヨリ特別ニ第千五
十條ヲ彼レニ通用シ破産者ト等シク罰スハ
キモノトスルハ其當ヲ得タリ(此外管財人ハ
(失信用ノ罪ヲ以テ論セラル、下アルハシ補
速刑法第二百六十六條佛國利法第四百八條
千八百六十三年五月十三日ノ同國法律)

第千五十三條

債権者集會ニ於ケル議決ニ関シ債権者ニ賄賂
ヲ為シタル片ハ其雙方ヲ二個年以下ノ重禁錮
又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス
各國法律多クハ前諸條ノ外三種ノ行為ヲ有
罪ト為ス是レ其行為ノ法律ニ反リ債権者ニ
不利ヲ蒙ルラシムルヲ目的トシ不正當ニ
財團ヲ滅殺スル普通ノ所業ニ屬スルト云フ
ニ出ツ即チ其一ハ債権者集會ニ於テ可否ヲ
左右セン為シ債権者ニ賄賂スル下ニ其ニ財
團ノ損失トナル約束即チ共同ノ原則ニ從ヒ
正當ニ得ヘキモノニ超ユルノ利益ヲ債権者

得セシケルヲ目的トスル約束其三ハ財團
 對スル債権ノ届書ヲ偽ルト是レナリ而シ
 其買得シタル可否決ラ実ニ為シタルヤ或
 ハ其約束実施セラレタルヤ又ハ虚構ノ債権
 實ニ辨償ヲ受ケタルヤハ一ニ論スルヲ須ヒ
 不然レ氏是レ支拂停止ノ後ニ在ルニ非サレ
 ハ罪トスヘカラサルト自然ノ勢ニシラナ
 第六冊第百二十二條且此罪ヲ犯シ得
 へキモノハ破産者或ハ管財人ト債権者トノ
 間或ハ債権者數名ノ間ニ於ラズ余々右ニ掲
 シル罰則ハ殊ニ佛國高法第五百九十三條第
 二項第五百九十七條白國高法第五百七十五

條第二項第三項：記スル所ニシテ獨逸劇產
 法第二百十三條ニ於テハ唯タ可否ノ賣買ヲ
 罰ス本室ハ則チ此例ニ倣フ何トナレハ他ノ
 罰則ハ嚴ニ失シ刑法普通ノ原則ト隔絶スル
 一甚タシケレハナリ且佛國高法第五百九十
 八條ニ於テハ右ノ約束ヲ以テ無効トスル普
 通ノ原則ニ依リ自カラ明ニシテ特ニ明言ス
 ルヲ要セス
 佛國高法第八十九條及ニ同國刑法第四百四
 條ニ依レハ仲買人ニシテ破産シタル者ハ必
 ス有罪破産ヲ以テ論ス此嚴法ハ仲買人元來
 法律ニ依リ自己ノ為メニ取引ヲ為ス能ハス

若シ此法律ヲ犯スニ非サレハ破産ニ至ルヲ
難シト云フニ出ツ此理ヤ假令ニ其當ヲ得タ
ルニ(疑義ヲ免レス)其法律ヲ犯スノ一事ヲ以
テ必ラスシテ詐偽ノ意アリトスルヲ得ス加
之該規則ハ佛國ニ於テモ實施セス(アラワ
ル第六冊第八十二葉)故ニ本案ニ於テハ之レ
ヲ採用セズ

第十章 破産ヨリ生ズル身上ノ結果

第一千五十四條

破産宣告ヲ受ケタル債務者又ハ破産シタル商
事會社ノ無限責任社員若クハ取締役ハ復権ヲ
得ルニ至ルマテハ取引所ニ立入ルヲ仲立人ト
為リ合名會社若クハ合資會社ノ社員ト為リ又
ハ株式會社ノ取締役ト為ルヲ清算人、破産管財
人若クハ商事代人ノ職ヲ執ルヲ商會會議所ノ
會員ト為ルヲ其他商會上ノ榮譽職ニ就クヲ得
ス

諸國ノ法律ニ徼スルニ破産宣告ヲ受ケタル
債務者ハ其財産ニ關スル効驗ノ外其一身ノ上

ニ係ル損害ヲ蒙ルリ其權利上ノ能力ニ就テ
制限ヲ受クル甚ク大ナリ其理由ハ破産者ヲ
以テ徳義及ニ法律上瑕瑾アルモノト爲シ公
衆ノ信用ト清白ノ聲聞トヲ有スルニ非ラサ
レハ施用スヘカラサル所ノ權利ヲ奪フニ在
リ凡ソ破産者ノ失ナフ權利ハ半ハ政治上半
ハ私法上殊ニ商事上ニ係ルモノニシテ此ニ
論ズル所ハ唯々商事上ニ係ル何ントナレハ
他ハ皆テ該當ノ法律ニ任放スヘケレハナリ
(佛國高法第六百四條乃至第六百十四條白國
高法第五百八十六條乃至第五百九十二條和
蘭高法第八百九十二條乃至第八百九十九條

西國高法第四百六十八條乃至第四百七十五
條奧國千八百六十八年十二月二十五日ノ倒
産法第二百四十六條乃至第二百五十三條千
八百七十七年ノ獨逸倒産法ニ於テハ此事ニ
就テ一モ定ムル所ナシ何ントナレハ之レヲ
以テ破産法及ニ破産手續ノ範圍外ニ屬スル
モノトシ且ツ各聯邦ノ公法各々異ナルニ因
リ統一ノ法律ヲ用ユル能ハスト視タレハナ
リ蓋シ此理由ヤ商事上ニ於ケル破産ノ結果
ニ就テテ論スレハ其當ヲ得タリト爲スヲ得
ス然レ凡當時立法上ノ情態ニ照セハ是レ各
聯邦ノ法律ヲ以テ論スヘキモノナリシテ明

カケリ即チ字國ニ在テハ千八百五十五年五月八日ノ倒産法第三百十條乃至第三百十八條アリ巴波里國ニ在テハ千八百六十九年四月二十九日ノ訴訟法第五篇(倒産)アリ(ザルウエ)「緒言第五十四葉以下」

佛國高法第六百十三條ニ於テハ高事上權利ニ関スル結果ニ付テハ獨リ取引所ニ臨ムヲ禁シ第八十三條ニ於テハ高業仲立人トナル資格ヲ奪ヘリ蓋シ此外高ホ佛國ニ於テ禁ズル所アルヤハ疑義ヲ免レヌ(アラワール)第六冊第二百六葉以下)獨逸各邦ノ倒産法ニ於テハ此結果ヲ論スル稍ヤ細密ニ涉リ本業亦

之ニ概テ何トナレハ可及的商業上ニ於ケル公然ノ德義ヲ保護スルハ甚タ緊要ナレハナリ蓋シ今日ノ情態ヲ以テ論スレハ取引所ハ百般ノ尋常正當ナル商業ノ輻湊スル所ナレハ取引所ニ臨ムヲ禁スルハ既ニ殆トト而般ノ商業取引ヲ禁シタルニ同シ(字國倒産法第三百十條)換國倒産法第二百四十六條)高事會社ニ関スル規則ヲ設ケタルハ此ノ如キ人々ハ凡テ外ニ對シテ會社ノ名代タル者ニシテ其會社ノ經理ニハ特別ノ必要トシ若シ此等ノ人ニシテ債權者ニ辨償スルノ力既ニ乏シケレハ其連帶義務モ賴ムニ足ラザレ